

秋田県文化財調査報告書第153集

西山地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ

—— 高 瀬 館 跡 ——

1987・3

秋田県教育委員会



高瀬館跡、堪忍沢遺跡航空写真（東側斜め上空から）



出土青磁片

序

先人の築いてきた文化遺産に接し、郷土の歴史や文化を正しく理解していくことは、潤いのある豊かな人間生活を営むことにつながります。埋蔵文化財は、そのための貴重な文化遺産の一つであり、その調査、研究は郷土の歴史を知るうえで大切な役割を果たしています。

この度、農業用基幹道路として、西山地区農免農道整備事業が着工され、路線の一部が中世城館として知られる高瀬館にかかることになりました。このため、秋田県教育委員会では文化財保護を目的として本年度発掘調査を実施いたしました。

その結果、中世城館に特有の方形竪穴状遺構や、墓壙と考えられる土坑などが検出されました。

本報告書は、これらの調査成果を収録したものであり、今後の郷土の歴史研究と埋蔵文化財の保護に広く活用していただければ幸いです。

最後に、この調査にあたりご協力いただきました秋田県農政部鹿角農林事務所、鹿角市教育委員会、久保田自治会をはじめ関係各位に心から感謝の意を表します。

昭和62年3月31日

秋田県教育委員会

教育長 齋藤 長

例 言

1. 本書は西山地区農免農道整備事業に係る高瀬館跡の発掘調査報告書である。
2. 本文中に使用した前館、熊館、浦館の名称とその範囲は昭和59年度鹿角市教育委員会発行の鹿角市文化財調査資料25『鹿角の館(3)』に従った。
3. 本報告書の執筆は秋田県埋蔵文化財センター文化財主事 小林克が行った。
4. 本書を作成するにあたり、早稲田大学 桜井清彦教授から「館」跡全般に亘る御教示を賜った。また鹿角市史編纂委員 安村二郎氏からは鹿角地方の中世史について、さらに鹿角市教育委員会 秋元信夫氏からは鹿角市での発掘調査にもとづく中世城館跡について、秋田市教育委員会 日野久氏からは青磁碗について、それぞれ御教示をいただいた。記して謝意を表す。
5. 第5章第1節の「高瀬館跡出土炭化米計測結果」は、株式会社パリオ・サーヴェイに委託した結果である。また、第2節の「 ^{14}C 年代測定結果」は、学習院大学年代測定室に委託した。
6. 本書挿図中に使用した土色表記法は、農林省農林水産技術会議事務局、財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』に拠った。
7. 本書に使用した西山地区農免農道関係遺跡の位置図は、建設省国土地理院発行50,000分の1地形図である。
8. 本文と挿図に使用した略記号は以下の通りである。

S K I	………	方形竪穴状遺構	S K	………	土坑
S D	………	溝	S B	………	掘立柱建物跡
9. 挿図に使用したスクリーントーンの凡例は以下の通りである。

	図 山		酸化物
---	-----	---	-----

目 次

序

例言

第1章	はじめに	1
	第1節 発掘調査に至るまで	1
	第2節 調査の組織と構成	3
第2章	遺跡の立地と環境	4
	第1節 地理・地形的環境	4
	第2節 歴史的環境	8
第3章	発掘調査の概要	10
	第1節 遺跡の概観	10
	第2節 調査の方法	13
	第3節 調査の経過	14
第4章	調査の記録	17
	第1節 検出遺構	17
	第2節 出土遺物	38
第5章	自然科学的分析	45
	第1節 炭化米計測結果	45
	第2節 ¹⁴ C年代測定結果	47
第6章	まとめ	48
	方形竪穴状遺構について	48
	熊館第Ⅰ郭の遺構からみた変遷について	49
	出土遺物からみた高瀬館の年代	50
	結び	53

図 版 目 次

巻頭カラー図版	高瀬館跡、堪忍沢遺跡航空写真 高瀬館跡出土青磁片	
図版 1	高瀬館跡周辺航空写真	55
図版 2	高瀬館（熊館部分）遠景 調査区（熊館第Ⅰ郭）全景	56
図版 3	調査区（熊館第Ⅰ郭上面東端）現況 南側段築部分調査区調査後状況	57
図版 4	1 郭上面調査区南縁遺構確認状態 2 第1号方形竪穴状遺構（SKI01）、 第8号方形竪穴状遺構（SKI08）確認状態 3 第2号方形竪穴状遺構（SKI02）確認状態 4 第1号方形竪穴状遺構（SKI01）、 第2号方形竪穴状遺構（SKI02）完掘状態 5 第3号方形竪穴状遺構（SKI03）確認状態 6 第3号方形竪穴状遺構（SKI03）東－西断面	58
図版 5	1 第3号方形竪穴状遺構（SKI03）完掘状態【北＞南】 2 第3号方形竪穴状遺構（SKI03）完掘状態【東＞西】 3 第4号方形竪穴状遺構（SKI04）完掘状態 4 第8号方形竪穴状遺構（SKI08）完掘状態 5 郭上面調査区北縁遺構確認状態 6 第7号方形竪穴状遺構（SKI07）確認状態	59
図版 6	1 第7号方形竪穴状遺構（SKI07）完掘状態【西＞東】 2 第2号土坑（SK02）、 第8号方形竪穴状遺構（SKI08）完掘状態【東＞西】 3 第9号方形竪穴状遺構（SKI09）確認状態 4 第9号方形竪穴状遺構（SKI09）東－西断面 5 第9号方形竪穴状遺構（SKI09）完掘状態【西＞東】 6 第9号方形竪穴状遺構（SKI09）完掘状態【北＞南】	60
図版 7	1 第1号土坑（SK01）確認状態 2 第1号土坑（SK01）南－北断面 3 第1号土坑（SK01）刀子出土状態 4 第1号土坑（SK01）完掘状態 5 第2号土坑（SK02）確認状態 6 第2号土坑（SK02）東－西断面	61
図版 8	1 第2号土坑（SK02）南西側からの断面 2 第2号土坑（SK02）銅銭出土状態 3 第2号土坑（SK02）完掘状態 4 第3号土坑（SK03）確認状態 5 第3号土坑（SK03）東－西断面 6 第3号土坑（SK03）完掘状態	62
図版 9	1 第4号土坑（SK04）完掘状態 2 第5号土坑（SK05）完掘状態 3 第7号土坑（SK07）完掘状態 4 第9号土坑（SK09）完掘状態 5 第1号溝跡（SD01） 6 第10号方形竪穴状遺構（SKI10）と地山流失部分	63
図版 10	調査後全景 各遺構内出土銅銭	64
図版 11	各遺構内出土遺物（1）	65
図版 12	各遺構内出土遺物（2）	66
図版 13	各遺構内出土遺物（3）	67
図版 14	各遺構内出土遺物（4）	68
図版 15	各遺構内出土遺物（5）その他	69
図版 16	作業風景 調査参加者	70

第1章 はじめに

第1節 調査に至るまで

西山地区農免農道は、鹿角市西山地区一帯の畑作物および果樹の流通合理化をめざして昭和57年に計画策定が行われた。昭和58年に一部工事が着工に移され、現在昭和65年度の工事終了、開通をめざしている。西山地区での総延長は久保田橋から神田林道まで6,515mである。この6.5km余りの計画路線における埋蔵文化財の有無を確認する遺跡分布調査が昭和59年6月26日、27日および同年12月3日～4日の2回にわけて実施された。第1回目には、計画路線が踏査され、この結果を補足するために第2回目には坪掘りによる試掘調査が行われた。その結果、8箇所の遺跡のあることがわかった。それらは第1表のとおりである。

第 1 表

確認遺跡	所在地	地 形 ・ 現 況	遺物・時代
中畑遺跡	鹿角市花輪字中畑	神田沢川と花軒田川にはさまれた標高約170mの台地南西部上の遺物包含地。試掘の結果、表土である黒土は北側で50cm、南側で110cmある。現在果樹園として利用。	弥生土器 縄文土器 不定形石器
太田谷地館跡	鹿角市花輪字太田谷地	神田沢川と花軒田川にはさまれた標高150～170mの舌状台地の東南端。空堀と沢によって区切られた三つの郭がある。南東側にある高屋館跡と関連する可能性がある。現況は山林、原野、果樹園。	中世 縄文土器 (後期前葉)
用野目川向Ⅰ遺跡	鹿角市花輪字用野目川向	花軒田川と米代川にはさまれた起伏の多い、標高193mの山地尾根部分の遺物包含地。遺跡の範囲は馬の背状にのびた平坦部と東西にのびた緩斜面。現況は山林。	縄文土器 (後期前葉)
用野目川向Ⅱ遺跡	鹿角市花輪字用野目川向	花軒田川上流の堤ノ沢と米代川にはさまれた標高205mの山頂部分と、それから南西方向にのびる緩斜面の遺物包含地。現況は畑地。	縄文土器 (晩期) 弥生土器
用野目川向Ⅲ遺跡	鹿角市花輪字用野目川向	米代川と花軒田川にはさまれた標高200mの丘陵西斜面の遺物包含地。現況は畑地。	縄文土器 弥生土器 土師器
堪忍沢遺跡	鹿角市花輪字堪忍沢	米代川左岸の標高177mの段丘上にある遺物包含地。高瀬館との関連の可能性あり。現況は畑地、原野。	縄文土器 陶器
高屋館跡	鹿角市花輪字館ヶ沢	米代川と花軒田川にはさまれた、南北にのびる標高150m前後の舌状台地北端の平山城。多郭連続式の城館跡で広さは南北380m、東西500mある。現況は畑地、山林、果樹園。	縄文土器 (後期) 中世
高瀬館跡	鹿角市花輪字堪忍沢、字浦館、字小森沢	米代川に面した段丘状にある平山城。南北1,000m、東西160mの範囲にある多郭連続式の城館跡。現況は山林、畑地、原野。	土師器 中世

第2節 調査の組織と構成

所在地	秋田県鹿角市花輪字小森沢119-20他
調査期間	昭和61年7月1日～8月2日
調査対象面積	750㎡
調査面積	830㎡
調査主体者	秋田県教育委員会
調査担当	熊谷 太郎 (秋田県埋蔵文化財センター学芸主事) 小林 克 (秋田県埋蔵文化財センター文化財主事)
調査事務担当	加藤 進 (秋田県埋蔵文化財センター主査) 高橋 忠太郎 (秋田県埋蔵文化財センター主事)
調査協力機関	秋田県農政部鹿角農林事務所 鹿角市教育委員会 鹿角市久保田自治会

第2章 立地と環境

第1節 地理・地形的環境

米代川の上流にある鹿角地方は秋田県の北東部に位置し、北を青森県、東を岩手県と境を接している。鹿角地方の地形的な特徴は、奥羽脊梁山脈と太平山地に囲まれた地溝盆地であることにある。奥羽脊梁山脈は、北東—南西に連続する急崖をもって花輪盆地に臨んでいる。山脈中には、中岳(1,024m)、四角岳(1,003m)などの高峰がそびえている。また西側の山地である太平山地中、盆地に接する高森山地は、北北西—南南東の方向に連なった崖線によって盆地内に臨んでいる。この山地は奥羽脊梁山脈が高峰の連なりからなるのとは対照的で、夜明島川上流の高森山で標高1,005mを測るほかは、三ノ岳(618m)、土筆森(263m)など比較的低い山が起伏を見せながら連なっている。このような2つの山地によってはさまれた花輪盆地は、北に向かって開いた南北に長い三角形を呈している。

盆地内に流れ込む川としては、米代川、大湯川の2つの大きな水系がある。奥羽脊梁山脈中岩手県側の安比岳付近に源をもつ米代川は、はじめ脊梁山脈を西に流下して盆地内にいたる。そして花輪盆地の南側で八幡平を流下してきた熊沢川と合流し、盆地内を北流する。さらに盆地の北部、鹿角市十和田松ノ木付近にいたると、十和田湖付近から流下してきた大湯川を合わせて十二所峡谷を抜けて西流する。また大湯川は、十和田湖の南、十和利山付近から南西に流れ下り、途中鹿角市十和田大湯中滝付近で西流してきた安久谷川を合わせ、松ノ木近くで小坂川を合わせた後に米代川と合流する。盆地南部を流れてくる米代川が、それほど大きな支流をもたないのに対し、北部を流れる大湯川は、小坂、安久谷の二大支流をもち、さらにそのそれぞれが荒川、相内川、汁毛川などの支流をもつ。したがって盆地北部は南部にくらべて、これらの河川によって開析された複雑な地形をみせている。

花輪盆地には、いくつかの河成段丘が最低位の沖積地と山地の間に連なっている。その分布は主に奥羽脊梁山脈に接した盆地東部に広い。内藤(1970)は花輪盆地内の基盤となる段丘を、花輪高位段丘群、花輪中位段丘群、花輪低位段丘群と区分した。そしてそのうえで、中位段丘面形成後から低位段丘面形成後にいたる段丘の変位を、現在観察される地形とあわせ、第1期および第2期の十和田火山噴出物堆積との関連で4つに区分、設定している。それによると、この火山噴出物の堆積する段丘面は、上位から鳥越段丘、関上段丘、中間段丘、毛馬内段丘と命名されている。鳥越段丘は、小坂町鳥越付近に標式地をもつ鳥越軽石質火山灰の堆積する段

丘面で、盆地北部、小坂町周辺では200～230m、盆地中央部でやや低く150～180m、盆地南部で再び高くなって200～220mという標高をもつ。構成層は軽石流堆積物である無層理の火山灰(ash)層で、まれにlapilli大の軽石のあいだをashが埋める場合も観察されるという。¹⁴C年代の測定結果では、12,000±250yB. P. および10,400±200yB. P. という結果が得られている。

関上段丘はこの鳥越段丘を切って形成され、火山碎屑物の河成二次堆積層によって構成される。標高は鳥越段丘とほぼ同じく、地形によって区分することは難しい。層理の発達がよく、石質の角～垂角礫、軽石、砂などが互層をなしている。関上段丘は一たん侵食された谷を、大湯川が供給する十和田湖周辺の火山碎屑物が埋めてできた段丘であるため、大湯川沿いでは15～30mという非常に厚い層厚を示している。しかし他の箇所では、おおむね6m以下の薄い層として鳥越軽石質火山灰層の上に存在する。またこの関上段丘上には申ヶ野軽石質火山灰層がのることもある。

鳥越段丘および関上段丘とも盆地の縁辺近くから広く分布しており、鹿角地方にある遺跡の多くは、この両段丘面上に立地している。

中間段丘は関上段丘と毛馬内段丘の間に位置する段丘である。中間段丘の存在する鹿角市十和田大湯集宮付近では、西流してきた大湯川が熔結凝灰岩の露頭にぶつかり、流路を大きく南へ変えている。この熔結凝灰岩の露頭は、集宮付近を南の端として北へのびる芦名沢断層のためとされるが、流路を変えた大湯川がその上流左岸に形成したのがこの中間段丘である。この段丘面は標高180m前後であり、集宮付近にのみ見られ、他では観察されない。

毛馬内段丘は火砕流堆積物である毛馬内軽石質火山灰層によって構成される。この毛馬内火山灰層は十和田火山の第2期の火山噴出活動に由来するとされ、¹⁴C年代測定では1,280±90yB. P. という年代が与えられている。分布は大湯川沿いおよび合流点以下の米代川沿いに限られ、能代平野まで達するとされる。集宮付近での標高は150m前後を測る。

以上の内藤の区分した4つの段丘は、おもに盆地北部の露頭の観察や試錐資料が元となっているが、藤本(1981)は、昭和54年から開始された東北縦貫自動車道関係の遺跡発掘調査に関係し、盆地南部の資料からさらに2段の段丘を追加している。それによれば、米代川左岸に沿って分布する松館段丘(標高160～170m)と、米代川右岸、浦志内川から大里付近まで分布する大里段丘(150～155m)の2つの段丘があり、前者は米代川の支流である夜明島川、黒沢川などによる扇状地の開析された段丘とされている。また後者は段丘基盤の更新統の一部がその下部の構成層となっており、上部では部分的に軽石質の二次堆積物が河床性の礫層を覆う大湯軽石質火山礫層の上ののることから、北部での毛馬内段丘に対比されている。

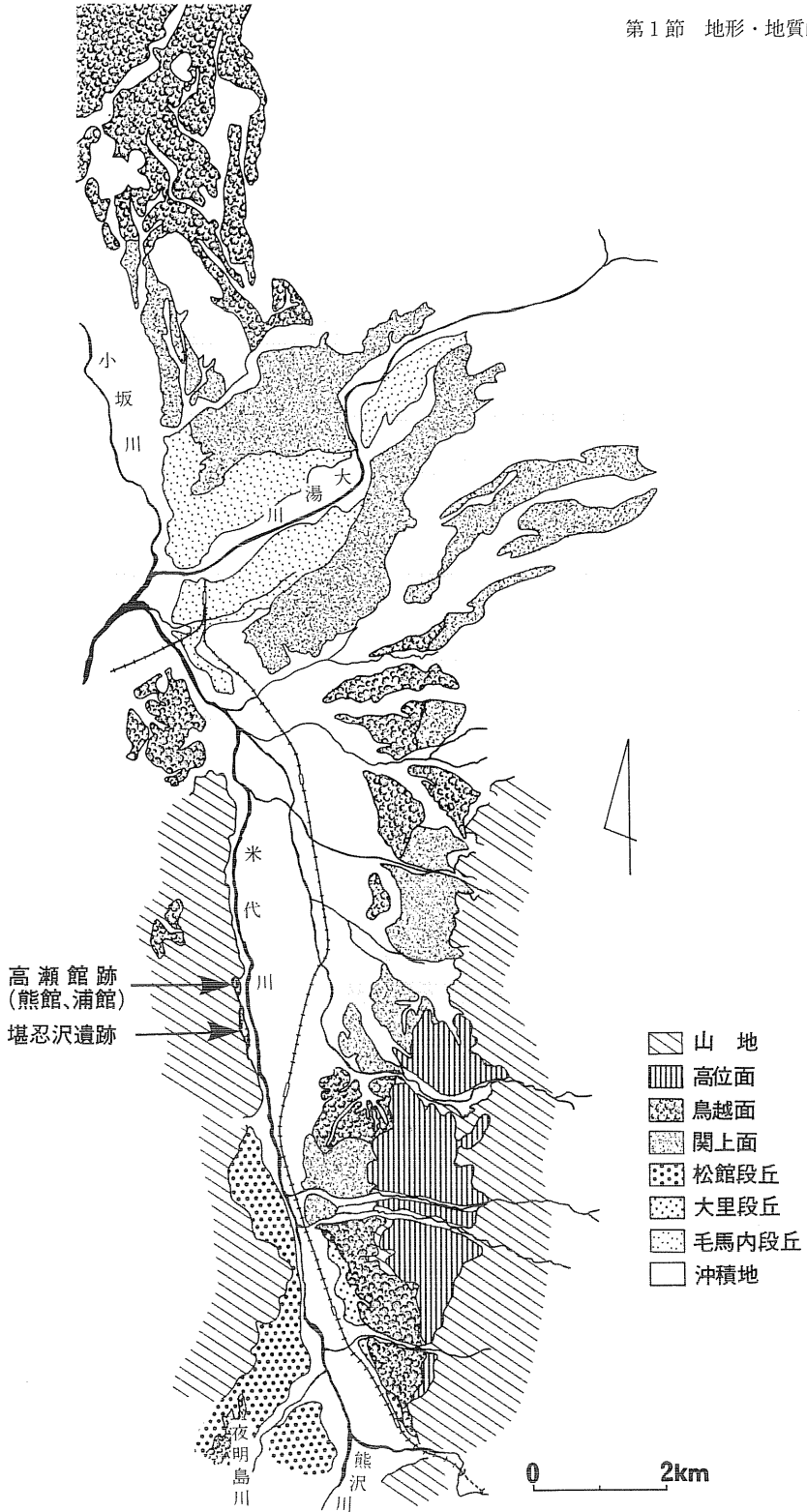
高瀬館跡、堪忍沢遺跡は南北に長い花輪盆地のやや南側に寄った位置にある。米代川の現在の河道は盆地の西側を南北に縦貫する花輪断層に沿って通っているため、この2つの遺跡の位

置する西山付近、特に尾去沢から高屋の間ではほとんど沖積地は形成されず、目立った段丘も認められない。標高180~300mの低いながらも起伏をもって連続する山地の斜面が、ほぼ直接に米代川に臨む景観を呈している。ただこのような丘陵性の地形にあって、高瀬館跡のある鹿角市花輪字堪忍沢、字小森沢、字浦館の周辺では、上面幅最大160m、長さ約1kmの南北に狭長な段丘面が残存している。これは高瀬館跡を構成する郭面に相当するが、藤本(1984)の段丘地形図によれば、この段丘面は鳥越段丘に相当する。高瀬館跡のうちその北部を占める熊館、およびこの段丘面の南部にある堪忍沢遺跡の周辺露頭の観察によれば、熊館では軽石を含む火山灰の堆積が30m近く認められ、鳥越軽石質火山灰層とその下位の高市軽石質火山灰層とが連続して堆積する層相を示すと思われる。また堪忍沢遺跡の調査区内では、地形に即応して2つの異なった層相が観察される。斜面側では表土層直下に凝灰岩の層があり、南側の平坦部分では表土層下に表面黄褐色に風化した軽石を含む火山灰層が10m以上連続している。この斜面側にあらわれた凝灰岩は石英などの斑晶に富み、熔結凝灰岩・礫質凝灰岩によって構成される鮮新世の椶内層とみられる。平坦部分を構成する火山灰層は鳥越軽石質火山灰層とみられるが、調査区からやや東へ降りた箇所では、この火山灰層の上部に河成堆積によるとみられる砂鉄層をはさむ層理の発達した二次堆積層があり、これについては関上段丘面に相当する可能性もある。

以上のことから、おおむね高瀬館跡、堪忍沢遺跡は西山一帯の東側斜面に分布する鮮新世の椶内層の谷間を埋めた、十和田火山の第1期の噴出物によって構成される段丘上に立地しているといえる。

注1 lapilli : 火山碎屑物の分類・名称の一つ。

- | | | |
|------|--|---------------|
| 参考文献 | 内藤 博夫「秋田県花輪盆地および大館盆地の地形発達史」
地理学評論第43巻第10号 | 1970 (昭和45) 年 |
| | 中川 久夫・大池 昭二他「十和田火山発達史概要」
岩井淳一教授記念論文集 | 1972 (昭和47) 年 |
| | 井上 武・上田 良一他「秋田県総合地質図幅『花輪』」
秋田県 | 1973 (昭和48) 年 |
| | 藤本 幸雄「地形と地質」『東北縦貫自動車発掘調査報告書Ⅰ』
秋田県教育委員会 | 1981 (昭和56) 年 |
| | 藤本 幸雄「地形と地質」『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅶ』
秋田県教育委員会 | 1984 (昭和59) 年 |



第2図 花輪盆地の段丘区分図

(井上、上田1973、藤本1981から作成)

第2節 歴史的環境

鹿角地方にある中世城館については、『津軽郡中名字』『鹿角由来記』『鹿角由来集』などの史料がのこっており、それらが伝える歴史も多い。こうした史料では中世鹿角には鹿角四氏、鹿角四天王などと称される安保、秋元、成田、奈良を名乗ったそれぞれの一族があり、さらにその一族が分かれて、花輪盆地の中に散在するその数42あるいは48ともいわれる館に拠ったことを伝えている。『鹿角由来記』『鹿角由来集』では館の所在とその館主が知行する所領が記され、現在、確認されている館跡と文献上の中世城館との比定も可能である。またこれらの中世城館跡については過去に幾つかの発掘調査例や踏査を中心とした調査例があり、報告書も既に刊行されている。発掘調査された遺跡としては、鹿角市内では八幡平湯瀬にある湯瀬館跡、八幡平長牛の長牛城跡、八幡平小豆沢の小豆沢館跡、花輪の花輪館跡、高市向館跡、新斗米館跡、妻の神Ⅰ、妻の神Ⅱ、妻の神Ⅲ遺跡として調査された乳牛館跡、旧柴平村にある小枝指七館などがある。また、鹿角市の北となりにある小坂町でも、はりま館遺跡、横館遺跡、白長根館遺跡が発掘調査されている。踏査の記録としては『秋田県の中世城館』に鹿角市郡内の58箇所の館跡の調査記録がある。この結果とならんで『鹿角の館(1)~(5)』では鹿角市内の27箇所の館について航空写真測量と踏査の報告をまとめ、ほかに『日本城郭大系2』でも鹿角市内の中世城館17箇所についての記述がある。

今回発掘調査が実施された高瀬館については、『鹿角由来記』に「一、高瀬村 高瀬土佐領知本名秋元 館有……居館高瀬也」と、鹿角四氏のうち秋元氏の一族、高瀬氏の居館であることが記されている。従来、秋元氏の本拠は小豆沢館であるとする『秋田県史』の説があったが、『鹿角の館(3)』ではこれと異なり、高瀬館が秋元惣領家の居館址であるとした見解が公にされた。この見解では、鹿角四氏とその所領についての関係を記した『津軽郡中名字』にある秋元氏所領3箇所のうち高瀬の地が筆頭にあげられていることを第一の論拠としてかけ、さらに第二に『鹿角由来記』に伝えられる秋元一族の6箇所の支配地のうち、高瀬館の知行村が六村と一村一館型の他の5箇所を抜きん出て多いことをあげている。中世鹿角に移り住んだ秋元氏については『津軽郡中名字』が前述の内容に続けて、『……公任卿ノ末孫也』と記している。公任即ち藤原氏であり、鹿角秋元氏が藤原道兼を祖とする近世大名宇都宮流秋元氏の一流とする見方が藤原姓秋元氏説の一つの根拠とも思われるが、これに対しては、平姓の関東御家人秋元氏の存在をあげ、平姓秋元氏が鹿角に下った可能性を指摘している。

近年いくぶん輪郭が明らかになってきたとはいえ、高瀬館についてはその館主である秋元氏一族についてと同じく、伝わる史料の少なさがいわれている。高瀬館を直接に語る史料が少ない以上、その時期の推定も大きな枠のなかでとらえられるに留まる。鹿角四氏が鹿角地方に

移り住んだとされるのは鎌倉時代後期以後のことであり、また鹿角地方の中世城館の多くは九戸騒乱に関係して、安土桃山時代の末期天正19年にいわゆる「館くずし」を受けている。したがって、高瀬館の中世城館としての存続期間はおよそ14世紀の頃から16世紀末頃までと推定されるが、秋元氏が鹿角を去ったのは天正19年以前であることがいわれており、その期間は数ある鹿角の中世城館のなかでも短いものではなかったかと考えられる。

中世城館の多さで知られる鹿角地方は、その他の時代にわたっても多くの遺跡がある地域として、また遺跡の発掘調査でも古くからの歴史を誇る地域として知られている。

昭和7年に地元の浅井小魚らによって発見されたとされる大湯環状列石は、戦中の神代文化研究所の発掘調査を経て、昭和26年、27年に文化財保護委員会と秋田県教育委員会によって発掘調査され、国の特別史跡に指定されている。また秋田県内でもっとも早く縄文時代の竪穴住居跡が見つかった鹿角市八幡平の清水向遺跡は、昭和29年、武藤鉄城らによって調査されている。さらに昭和30年には東京大学東洋文化研究所が、当時の柴平村にある小枝指七館遺跡を発掘調査している。これらの学史的な意義の大きい遺跡の発見、調査に加えて、昭和54年から開始された秋田県教育委員会による東北縦貫自動車道に関する発掘調査は、3年間に35箇所遺跡を調査している。この大規模調査では縄文時代早期から冒頭にあげた中世城館跡まで様々な遺跡が発掘調査された。またこの調査と相前後して新斗米館跡、御休堂遺跡、長牛城跡、高市向館跡などが鹿角市教育委員会によって発掘調査された。東北縦貫自動車道関係の発掘調査も鹿角市教育委員会が実施した発掘調査も、いずれも開発行為に伴う事前の緊急発掘調査であるが、鹿角地方における遺跡の調査の歴史は、県内のみならず広く東北地方での考古学史の中で位置づけても先駆的な役割を果たした諸例に始まり、現在では大規模調査および遺跡保存を目的とした調査にまで拡大してきている。

- | | | |
|------|---------------------------------|-------------|
| 参考文献 | 安村二郎・片岡正一・安倍良行「第四章 中世の鹿角」『鹿角市史』 | |
| | 鹿角市 | 1982（昭和57）年 |
| | 安村二郎・片岡正一・安倍良行・秋元信夫『鹿角の館(3)』 | |
| | 鹿角市教育委員会 | 1984（昭和59）年 |
| | 安村二郎・板橋範芳他『秋田県の中世城館』 | |
| | 秋田県教育委員会 | 1981（昭和56）年 |
| | 富樫泰時・安村二郎・小松正夫他『日本城郭大系2』 | |
| | 新人物往来社 | 1980（昭和55）年 |
| | 関直「湯瀬館遺跡・付篇」『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅰ』 | |
| | 秋田県教育委員会 | 1981（昭和56）年 |
| | 岩見誠夫『半田先生と秋田県の考古学』 | 1982（昭和57）年 |
| | 奈良修介・豊島昂『秋田県の考古学』 | |
| | 吉川弘文館 | 1967（昭和42）年 |

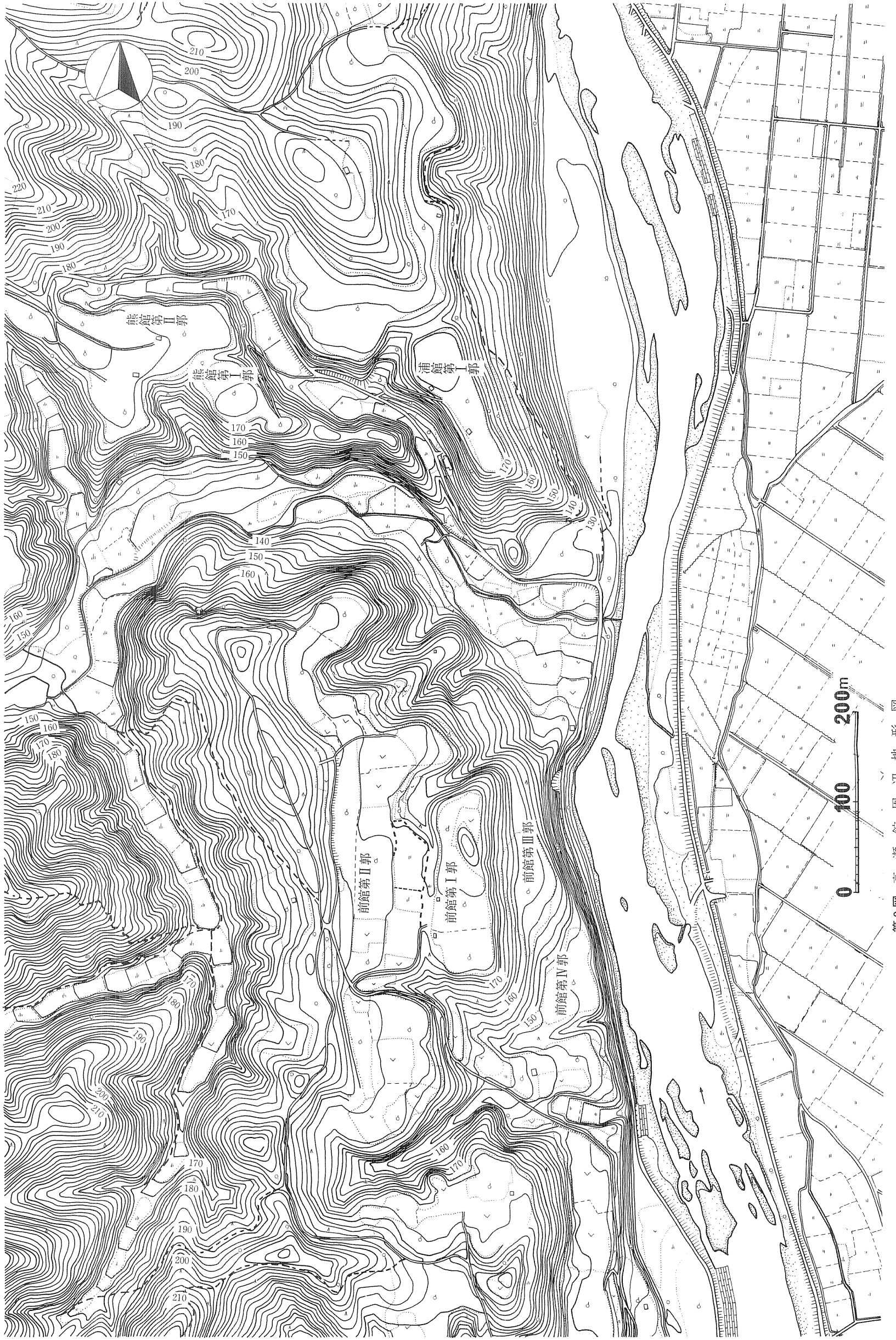
第3章 発掘調査の概要

第1節 遺跡の概観

高瀬館跡は通称、前館、熊館、浦館の3館からなる多郭連続式の中世城館跡である。高瀬館を構成する3館は米代川左岸の標高140~180mの台地上に立地する。前館、浦館は米代川に沿う位置にあり、熊館はそれよりやや西に奥まった位置にある。昭和58年に行なわれた航空写真測量と踏査による調査報告『鹿角の館(3)』によれば、前館、熊館には空堀などによって区切られた郭面がそれぞれ4郭、2郭存在し、浦館は後背台地との間を一本の空堀で区切った単郭であるとされている。また南側から前館、熊館、浦館とならぶ高瀬館全体の範囲を、南の縁は久保田橋から約370m北側の地点の沢筋で、北側を浦館の北にある果樹園の境で区切っている。さらに西側は米代川の方からみた時の最奥に位置する熊館第Ⅱ郭の西側急崖で、また東側は米代川で区切っている。したがって高瀬館全体は、熊館第Ⅱ郭を頂点としてやや偏平な「八」の字形に大小7つの郭面が分布する景観を見せている。今回、西山地区農免農道の建設工事のために記録保存を必要としたのは熊館第Ⅰ郭の東側先端部分にあたる。

熊館自体は浦館北側の山裾から東南東にのびる舌状台地上に立地する。山裾と台地の接する、現在市道久保田—花軒田線が通る部分は小森沢を介して米代川に注ぐ小谷の侵食で大きく削り込まれ、台地の南および西側は、高瀬館跡全域を前館側と熊館・浦館側に大きく2つに分割する小森沢とその支谷によって画される。小森沢の林道が通る部分と台地上面の比高は40m近くある。周囲を深い谷に刻まれた結果、第Ⅰ郭、第Ⅱ郭の2つからなる熊館はその全体が周囲の山地とも、また他の2館からも独立した形となっている。

熊館には大小4本の堀がある。1つは熊館全体の北縁を限る堀で、米代川に向かう小谷でもある。この堀と郭上面との比高は10~13mほどある。この部分はかなりの湿地で現在水田と杉林になっているが、前述の報告書では水濠的役割を果たしていたのではないかとしている。先端がいわゆる「馬の背」状となる舌状台地を区切る空堀は3本ある。この3本の空堀のうち第Ⅰ郭の西側および東側先端部を画する空堀は、それぞれ帯郭、腰郭とも思われる段築部分と連続している。第Ⅰ郭の北側から郭上面に通じる県道脇の段築部は、北側から北西側をまわり第Ⅱ郭の間の空堀を通して南側の斜面へ、また、第Ⅰ郭東端南側にある2段の段築のうち上段のものは東側の空堀をまわって北側の斜面へ、それぞれ抜け出ている。第Ⅰ郭から空堀によって切り離された台地の先端部は、第Ⅰ郭から東へ約90m程のびているがその中程にも浅い空堀があ



第3図 高瀬館周辺地形図

り、2つに分かれている。

第Ⅰ郭上面はおよそ4,500㎡の広さをもつが、75m×55mの方形区画の西側部分とその一画から東へ幅16m、長さ35mで突き出した部分とからなる。方形区画をもつ部分での標高は174m程あり、東に突き出した部分では172mほどで、僅かながらの傾斜がある。郭上面は現在草地となっているが、以前には畑地として利用されていたこともあり、貯水のためのコンクリート製の溜池などが残っている。郭上面での基本層位(第5図)は以下のとおりである。

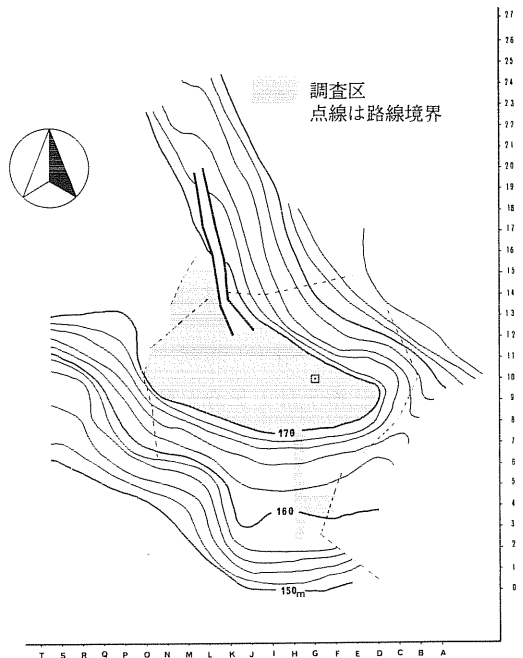
第Ⅰ層 表土層。郭上面では耕作土でもある。灰褐色の地山の火山灰層が耕作の攪乱で有機物を多く取り込み、全体に褐色がかった色を示す。粘度はほとんどなく、サラサラした感触がある。また孔隙も多い。熊館第Ⅰ郭の時期から現代までの遺物が包含されている。斜面にもものびており、さらに下の段築部をも覆っている。

第Ⅱ層 地山と表土層との間にある。色調は地山の灰褐色よりもやや褐色に傾くが、土質は第Ⅰ層に比べてしまっていて、わずかながら粘度もある。地山の整地以後に形成された層であり、第Ⅰ層の耕作はこの第Ⅱ層まで及んで行われたと推定される。

郭上面の調査区の南側の段築部は、現在灌木などの茂る荒れ地である。段築は2段認められ、下段のものは小森沢林道の付け替え道開設時に削られ、東側のわずかな部分しか残っていない。調査ではこの付け替え道路を保護するため、排土は路線内の段築部で処理することとし、この部分についてはトレンチによる調査に留どめた。

第2節 調査の方法

調査区は熊館第Ⅰ郭の方形区画部分から東にのびた先端部である。路線の範囲には郭上面と郭南側の段築部がかかり、調査区もこの2つに分かれている。郭上面については路線範囲の全域を、段築部については排土処理の問題からその一部を調査することにした。北側斜面は排土置場としたために、また東側の空堀部分は路線外となるた



第4図 グリッド配置図(縮尺1,500分の1)

第3章 発掘調査の概要

め調査の対象外となった。郭上面の調査区には表土除去に先立って方眼杭を打設した。工事用基準杭BC5を基準点とした磁北をとって4m区切りの座標を設定し、各座標の交点には東からA,B,C,D,E,F, ……とアルファベット、南から北へは0,1,2,3,4, ……とアラビア数字を振り当てている。4m四方の方眼区画の呼称はこのアルファベットとアラビア数字の組み合わせによって呼ぶこととした。基準点であるBC5の杭はG10が当てられている。また、段築部には4mの方眼を組むことができなかつたため、郭上面からおろしたHライン上に基準点を設けている。遺構平面図の作成は郭上面では方眼杭を用いての遣り方測量、段築部については基準点をいれての平板測量によって行った。遺構実測に際しては、20分の1の平面図、断面図をとることにした。また覆土の分層ができず、断面図を必要としないものについては遺構底面のレベルの計測を行い、エレベーション図を作成した。

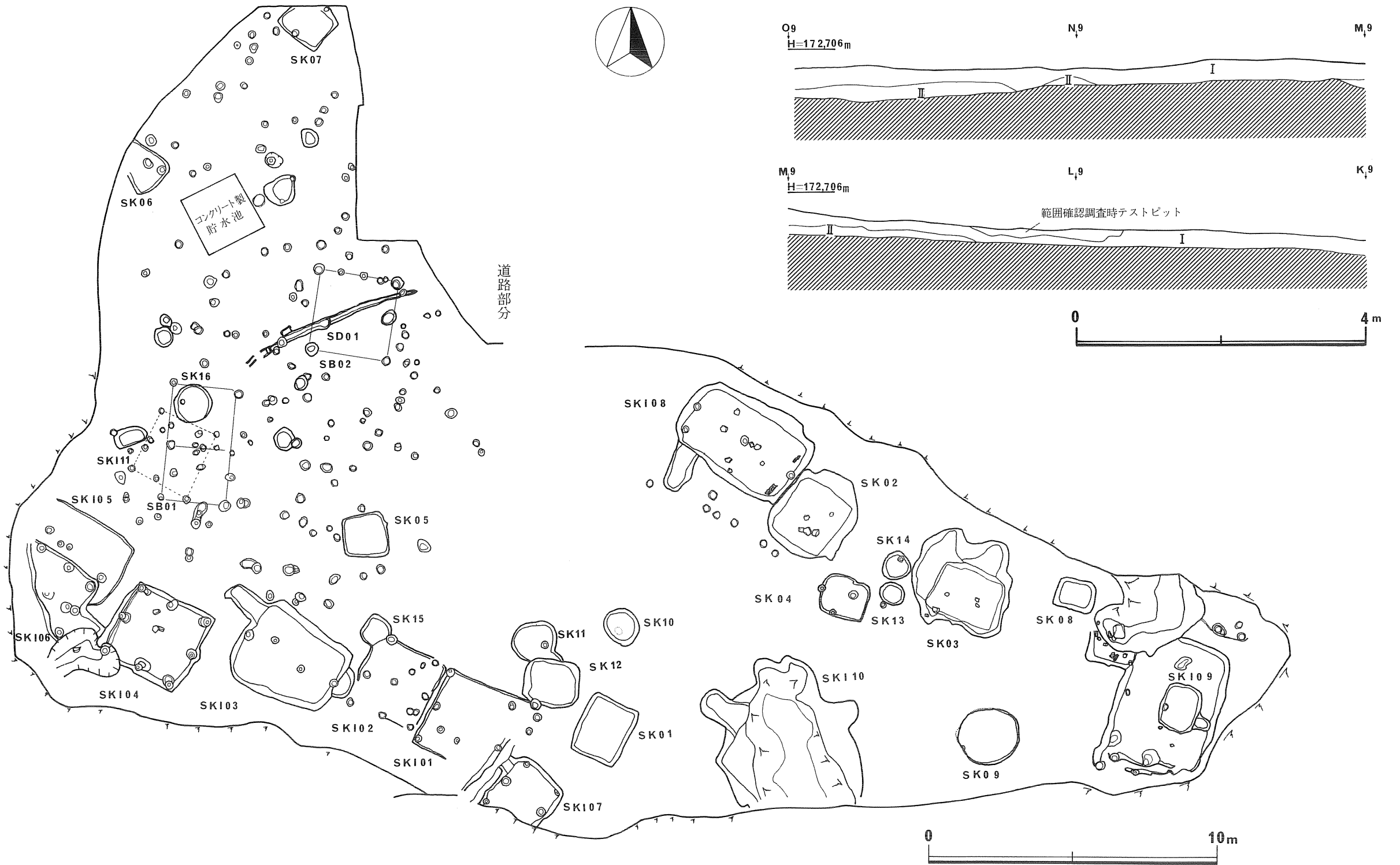
表土除去はすべて人力でおこなった。遺構精査は方形竪穴状遺構、大型の土坑については4分法を用い、その他の土坑については2分法によっている。遺構の出土遺物については出土位置を明らかにするため、覆土を掘りあげた後、実測または写真撮影が済むまで出土位置に留どめるようにした。出土遺物の多いSKI07やSK02については本報告書中にも出土位置を図示してある。

整理作業段階での、遺構の規模などの計測は以下のように行っている。

(1) 遺構の深さは原則として中央部と確認面の間で行い、部分によって著しく異なる場合はその部分についても測っている。(2) 方形竪穴状遺構、および土坑のうち方形のもの平面規模は、各壁の中点を結んだ中軸線の長さを測っている。壁の長さを測る場合には、ほぼ遺構を囲む四辺形を作り、各辺の長さを測っている。円形のもの平面形についてはその直径を測っている。(3) 方形竪穴状遺構、および方形の土坑の方角は長い方の中軸線との磁北との角度である。また、調査区の西側に多く確認された柱穴群については、整地によって壁の失われた方形竪穴状遺構、掘立柱建物跡の図上復元を試みた。

第3節 調査の経過

調査は昭和61年7月1日から開始した。表土の除去が終了したのは7月10日である。同日各遺構の平面プランの写真撮影を行っている。遺構の精査は写真撮影後に開始し、全体の遺構の覆土掘りあげの終了したのが、7月22日である。その後、遺構の実測作業にかかり、7月28日には郭上面の調査区の実測作業を終えている。斜面と段築部については7月28日から調査に入り、7月30日に掘りあげを完了している。この部分の実測作業は8月2日まで続けられ、同日写真撮影をおこなってすべての調査を終了している。調査期間中に、鹿角市教育委員会職員、鹿角市立図書館職員の遺跡見学があった。



第5図 郭上面調査区遺構配置図

第4章 調査の記録

第1節 検出遺構

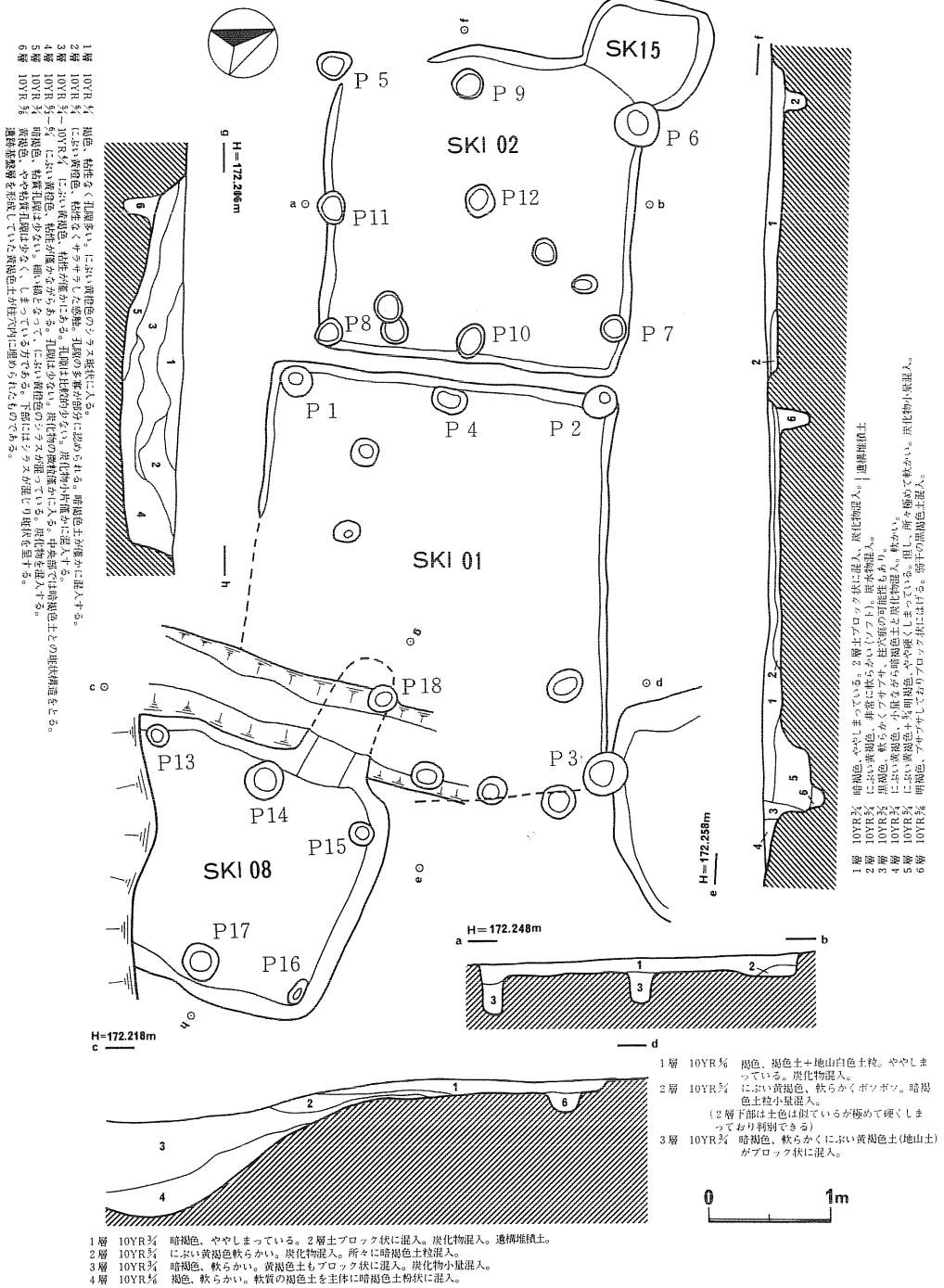
郭上面の調査区で検出された遺構は、^(註1)方形竪穴状遺構11基、土坑16基、溝1条、掘立柱建物跡2棟および150箇所余りからなる柱穴群である。調査された面積に比べて遺構数は多く、かなり密集した分布状態を示している。これらの遺構は東西に細長い調査区の中で、ある程度偏って存在する傾向が認められる。したがって極めて狭小な調査区の中でも遺構の分布に疎密があって、密に分布する部分では重複関係にある遺構例もある。4種の遺構では、調査区の西側に密に分布する柱穴群の一部が方形竪穴状遺構の覆土を切っている。また方形竪穴状遺構や土坑では実際に重複しているもの（SKI01, SKI08とSKI05, SKI06）のほかに、同時存在が不可能な程近接して構築されている例（SKI07, SK02やSKI01～SKI06）がある。

検出された遺構には深いもの（SKI03, SKI07, SKI09, SK02, SK04）と浅いもの（SKI01, SKI02, SKI04, SKI05, SKI06）とがある。この違いはおもに郭上面の整地に関わることと判断された。地形・地質的環境の項で述べたように地山を構成する層は鳥越火山層であり、この火山灰層は自然のままでは表面が風化して黄褐色となることが知られている。^(註2)自然地形上に立地する遺跡では、遺構はこの黄褐色の部分を持ち込んで作られており、調査時には通常この上面で遺構確認がされる。今回の調査区では基本層序にこの黄褐色の土層が認められず、遺構の確認面は灰褐色の火山灰層であった。また遺構覆土の観察でも僅かにブロック状の黄褐色土を含む例はあったものの、覆土の大半は火山灰の灰褐色が基色であって有機物の含まれる量の違いが色調の明暗となってあらわれ、それが分層の基準となっている。こうしたことから今回の調査区では、いまの状態となるまでのいずれかの時期に鳥越火山灰層上位の黄褐色土を含む部分が整地作業によって削りとられたものと判断された。

さらにまた調査区である郭上面自体が空堀などによって作り出された中世城館の構築遺構であり、本来舌状を呈していたと思われる台地の地形は大きく変えられている。現在残る熊館第Ⅰ郭の形状は中世城館跡として存在したその最終段階のものであり、それ以前にも空堀の増設、斜面の削り出しなどによって何回か郭面の作り替えが行なわれている可能性は、充分考えられるところである。広い面積を持つ第Ⅰ郭の東側先端部分に限っておこなわれた調査ではその詳細を明らかにすることはできなかったが、少なくとも郭面自体を一つの時期を持つ遺構としてみた場合、その上面で確認された遺構との時期的な関係を重複関係によって知ることはできる。SK

第4章 調査の記録

- 1層 10YR 5/2 褐色褐色土+地山白色土粒、ややしまっている。炭化物混入。
- 2層 10YR 5/2 におい黄褐色、軟らかくボソボソ。暗褐色土粒少量混入。
(2層下部は土色は似ているが極めて硬くしまっており区別できる)



- 1層 10YR 5/2 褐色、粘着性、土質多い。におい黄褐色の土を多量に混入する。
- 2層 10YR 5/2 褐色、粘着性、土質多い。におい黄褐色の土を多量に混入する。
- 3層 10YR 5/2 褐色、粘着性、土質多い。におい黄褐色の土を多量に混入する。
- 4層 10YR 5/2 褐色、粘着性、土質多い。におい黄褐色の土を多量に混入する。
- 5層 10YR 5/2 褐色、粘着性、土質多い。におい黄褐色の土を多量に混入する。
- 6層 10YR 5/2 褐色、粘着性、土質多い。におい黄褐色の土を多量に混入する。

- 1層 10YR 5/2 暗褐色、ややしまっている。2層土ブロック状に混入。炭化物混入。遺構埋積土。
- 2層 10YR 5/2 におい黄褐色、非常に軟らかい(シラフ)。炭化物混入。
- 3層 10YR 5/2 黄褐色、軟らかくボソボソ。暗褐色土粒少量混入。
- 4層 10YR 5/2 におい黄褐色、軟らかくボソボソ。暗褐色土粒少量混入。
- 5層 10YR 5/2 褐色、軟らかくボソボソ。暗褐色土粒少量混入。
- 6層 10YR 5/2 明褐色、ブロック状に混入。

- 1層 10YR 5/2 暗褐色、ややしまっている。2層土ブロック状に混入。炭化物混入。遺構埋積土。
- 2層 10YR 5/2 におい黄褐色軟らかい。炭化物混入。所々に暗褐色土粒混入。
- 3層 10YR 5/2 暗褐色、軟らかい。黄褐色土もブロック状に混入。炭化物少量混入。
- 4層 10YR 5/2 褐色、軟らかい。軟質の褐色土を主体に暗褐色土粉状に混入。

第6図 第1号方形竪穴状遺構 (SKI01)、第2号方形竪穴状遺構 (SKI02) 第8号方形竪穴状遺構 (SKI08)、第15号土坑 (SK15) 実測図

I06, SKI08, SKI10などの方形竪穴状遺構は、斜面を削り出した際に遺構の平面形の一部が失われており、熊館第Ⅰ郭の先端部が現在の形になった時期よりも古い時期の構築物であることは確実である。以上のことから、郭上面の検出遺構は熊館第Ⅰ郭が中世城館跡として構築される以前のもを含み、いくつかの時期に分けられることが想定されるが、以下に各遺構別に細部の特徴を記述してゆく。

1. 方形竪穴状遺構

方形竪穴状遺構は土坑とともに郭上面調査区の北縁、南縁にわかれてある。調査区はちょうど郭上面北縁を斜辺としたような直角三角形に近い形状をもっているが、この斜辺の東寄りの縁に列をつくる1群と、その反対側直角部分によった縁に列をなす1群とにわかれる。

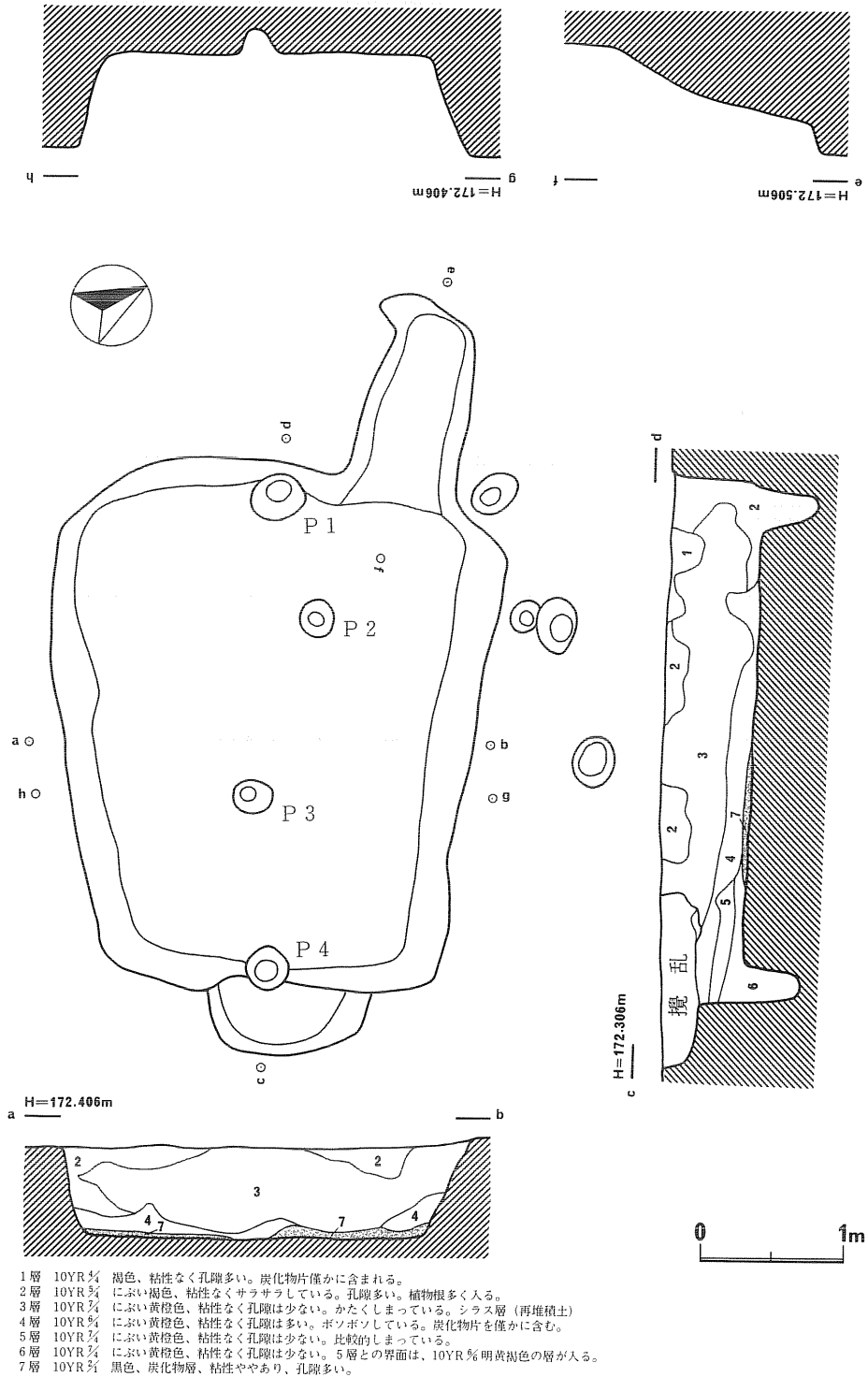
また平面形などの特徴からこの遺構を2類に分けることができる。一つは略正方形のもので、この類では柱穴はその四隅とさらにそれぞれの中間位置に設ける場合が多い。SKI01, SKI02, SKI04, SKI05がそれであり、確認時に残っていた遺構の深さは概して浅い。このなかには西側柱穴群のなかから図面上で復元されたSKI11も含まれる。他は略長方形の平面形で、壁の一边に幅70cm前後、長さ150cmほどの張り出し部を付設するものである。SKI03, SKI07, SKI08, SKI10がこれにあたり、SKI03, SKI07では遺構の長軸上に柱穴がある。これらの掘り込みは深いままに残っている。また張り出し部および長軸上の柱穴は確認できなかったが、SKI09も平面形からすれば後者の類である。SKI05についてはSKI06との重複、郭面との重複によって完全な形での平面形が確認できていない。柱穴の位置も把握できず判然としない点が多いが、ここではその平面的規模から方形竪穴状遺構として扱う。

(1) 第1号方形竪穴状遺構(SKI01)〔第6図、図版4〕

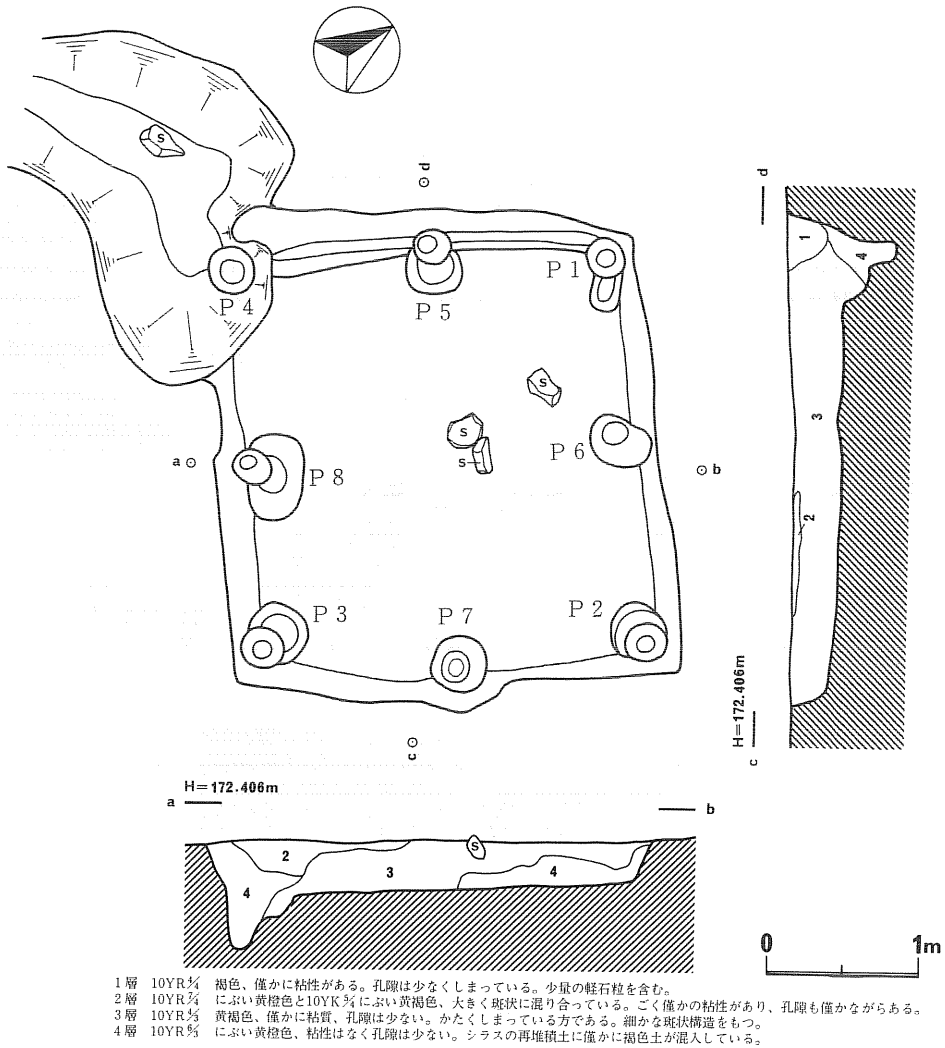
調査区南縁ほぼ中央部、L8グリッドで検出した。西側の壁の長さは390cm、北側では440cmある。残っていた遺構の掘り込みは極めて浅く、確認面から10cm前後しかない。東側、南側の壁面は確認できていないが、その柱穴配置からわずかに東西方向に長い平面形に復元できる。

また北側の壁に沿う線は磁北から64度西によった方向を向く。柱穴として確認できたのは南西隅、北西隅、北東隅の3箇所と西壁中央の1箇所の計4箇所である。遺構底面からの深さはそれぞれP1:17cm, P2:41.5cm, P3:19cm, P4:25cmである。また東側の壁の想定線上中央、P4と相対する位置にもピットがあり、他にも3箇所認められる。覆土は全体に暗い色調である。出土遺物はない。

本遺構の東側底面下には、本遺構よりも古い時期に地山の抉られた痕跡があり、幅70cm深さ80cm程の溝となっている。この地山流失部分^(註3)を介して東側にSKI08があるが、SKI08の張り出



第7図 第3号方形竪穴状遺構 (SKI03) 実測図

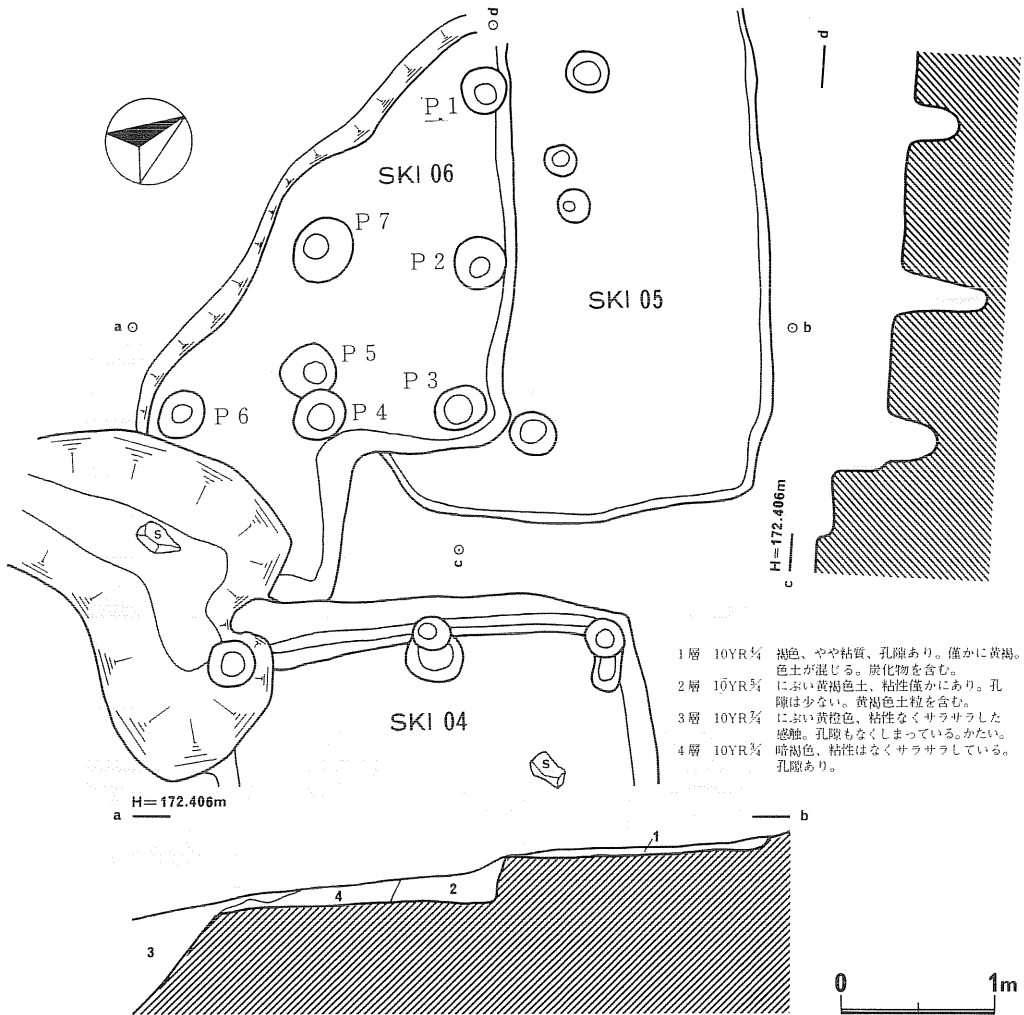


第8図 第4号方形竪穴状遺構 (SKI04) 実測図

し部は本遺構の覆土を切り込んで作られている。西側にはSKI02が密接するが、SKI01との重複はない。

(2) 第2号方形竪穴状遺構 (SKI02) [第6図、図版4]

第1号方形竪穴状遺構の西側、L9グリッドで検出した。東西および南北の各辺の中軸線で計測した長さはそれぞれ260cmずつあり、略正方形の平面形をもつ。南西隅では壁が確認できず、北西隅の壁はより新しい時期の土坑 (SK15) が切っている。東西壁中軸線 (P9-P10の線) は磁



第9図 第5号方形竖穴状遺構 (SKI05)、第6号方形竖穴状遺構 (SKI06) 実測図

北から68度西へよった方向を向く。柱穴は正方形の四隅と北側の壁を除いた各辺の中央部および遺構底面中央に計8箇所確認した。それぞれP5:20cm, P6:23cm, P7:7.5cm, P8:11cm, P9:18cm, P10:5cm, P11:33.5cm, P12:26.5cmの深さがある。SKI01同様遺構の掘り込みは浅い。覆土はSKI01と比較してやや明るい。P5の内部から鉄鍋の底部破片〔第20図6,7、図版12-3,4〕が出土している。

(3) 第3号方形竖穴状遺構 (SKI03) 〔第7図、図版4,5〕

第2号方形竖穴状遺構の西側に隣あって検出された。遺構の大半がM9グリッドにある。平面形は東西方向に長い長方形で、東および西の短辺の midpoint を結んだ中軸線の長さは380cmである。また西側の壁が東側より長く、各々320cm、230cmを測る。中軸線は磁北から70度西によつ

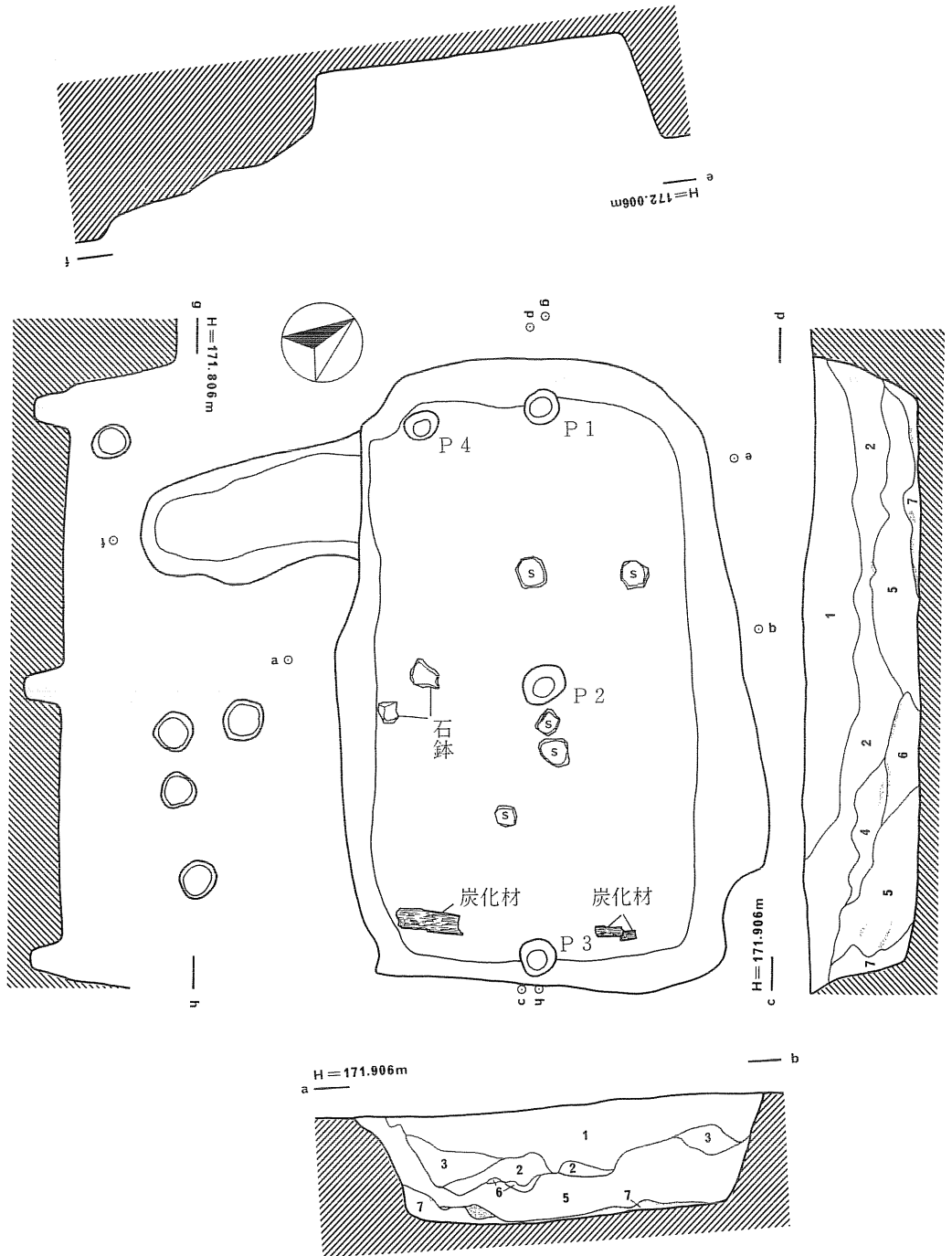
た方向を向く。遺構の掘り込みは深く、中央部での深さは確認面から60cm程である。西壁の北側寄りから幅74cmの張り出し部が130cm程西に向かってのびる。張り出し部底面の傾斜は、はじめ遺構の底面から30度前後でのぼり、中程にいたってさらに24度前後と緩くなる。柱穴はほぼ中軸線上に4箇所確認された。P1:38cm, P2:16cm, P3:15cm, P4:38cmで、西壁、東壁に接した柱穴(P1, P4)が対になる深さをもち、それより浅い内部の柱穴2つ(P2, P3)がやはり同程度の深さをもっている。覆土は幾分暗い色調の灰褐色を基色とした、地山とほぼ同じ火山灰によって大半が占められている。極めて堅く締まっており、底面との境に薄く広がる炭化物の層によって、かろうじて覆土と底面を判別することができた。出土遺物はこの薄層をなす炭化物の他にはない。東壁の一部は攪乱穴によって切られている。

(4) 第4号方形竪穴状遺構(SKI04)〔第8図、図版5〕

第3号方形竪穴状遺構の西側に隣接して、N9グリッドで検出された。平面形は壁を囲む四辺形の各辺の中点を結んだ中軸線の長さが、330cmと294cmの大きさの長方形である。わずかではあるが東西壁の間が南北壁よりも長い。南北壁の中軸線は磁北から28度東よった方向にある。西側の壁に沿って幅25cm程、確認面からの深さが45cmの溝がある。柱穴は四隅と各壁の中程に8箇所確認された。北壁の中程にあるP6と南西隅のP4についてははっきりそれと分らなかったが、他の6箇所の柱穴は柱の埋め込みか抜き取りの際の一段あさい掘り込みがある。それぞれの柱穴はP1:20cm, P2:30cm, P3:47.5cm, P4:41.5cm, P5:35cm, P6:17cm, P7:38.5cm, P8:26cmの深さがあり、四隅と東西壁中程に設けられた柱穴6つが南北壁中程の2つより深い。覆土は全体にやや黄褐色がかかった灰褐色の色調を呈する。遺構底面中央に焼けた痕跡のある石が3個あった他には出土遺物はない。遺構の南西隅にSKI01東側と同じ地山流失部分が、調査区南西の郭の「くびれ」に向かって開いている。中央での上面幅130cm、底面での幅60cm、深さ70cmの規模がある。調査区に4箇所ある他の例と同じく遺構の確認面では埋まりきっていたが、SKI04との新旧関係は把握できなかった。

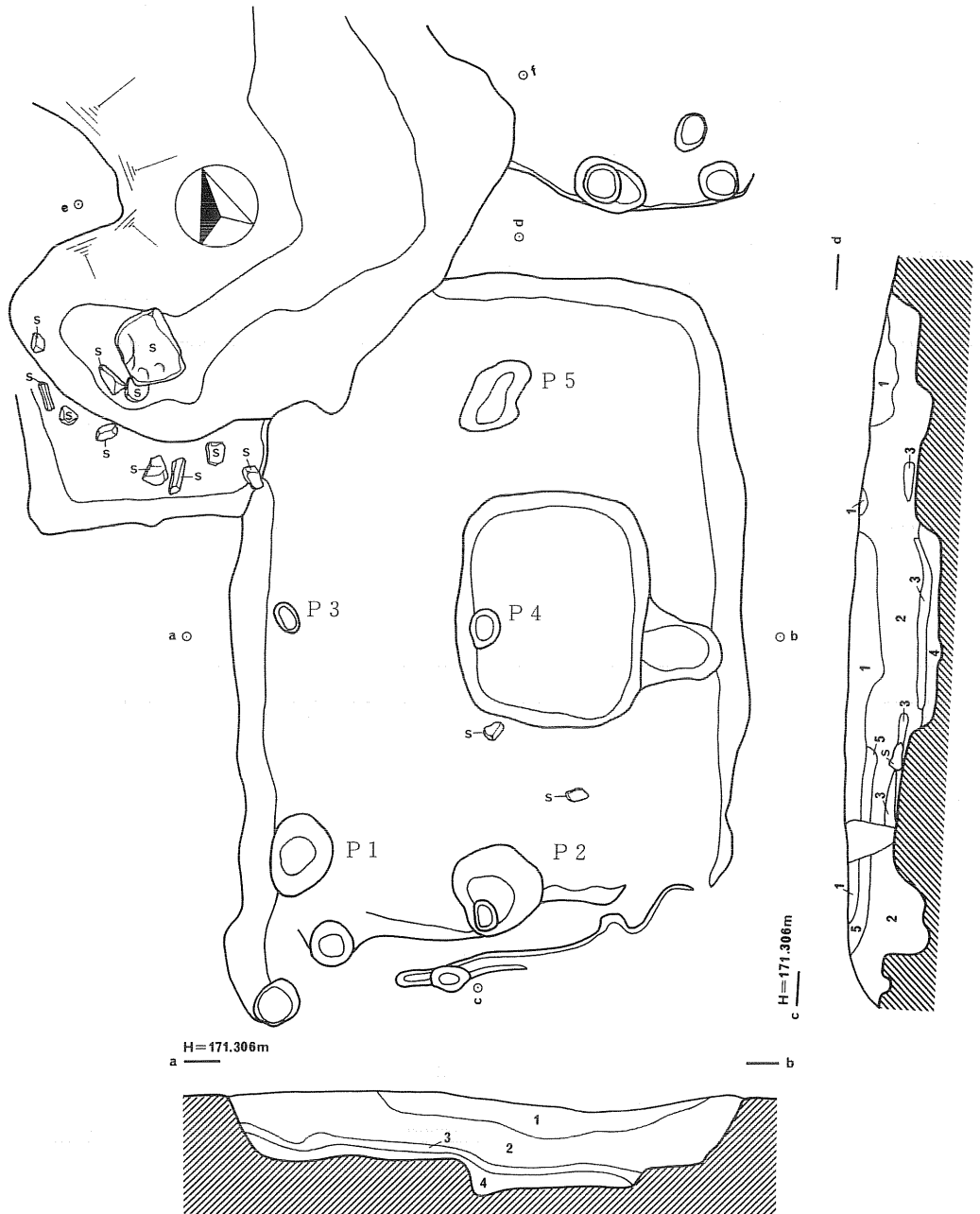
(5) 第5号、第6号方形竪穴状遺構(SKI05、SKI06)〔第9図〕

調査区の南西隅、第4号方形竪穴状遺構の西側、O9、O10グリッドで検出された。緩く傾斜しながら郭の「くびれ」に落ちる箇所にあつて表土の堆積も薄かったが、確認時にSKI06の輪郭が比較的明瞭であったこと、SKI05の底面がSKI06の上まで延びていないと判断されたことからSKI06がより新しいと推定される。またSKI06の東壁は途中から屈曲しており、この部分でさらに別の遺構が切りあっていることも有り得るが、半分以上を調査区南西側の斜面で削り取られており、委細不明である。両遺構ともその残った部分によって推定するかぎり、方形の平面形をもつ。それぞれの北側の壁に沿った線はSKI05で60度、SKI06で58度磁北から西に向いている。SKI06の柱穴は、北壁および東壁に沿った位置と中央部と推定される箇所に計7つあ



- 1層 10YR 5/4 に近い黄褐色、粘性弱。孔隙多い。柔らかい。径5~6cm程の円礫が含まれる。炭化物僅かな量含まれる。
 2層 10YR 5/4 に近い黄褐色、粘性弱。孔隙にはバラツキがあり、硬軟不均質である。径10~20cm程の円礫はこの層中にある。
 3層 10YR 5/4 褐色、2層に有機物を多く含む褐色土が多く混ったもの。斑状構造をもつ。
 4層 10YR 5/4 褐色、粘性はなくサラサラしている。孔隙も多い。炭化物、材この層中および以下の層に非常に多い。
 5層 10YR 5/4 に近い黄褐色、粘性は弱く、サラサラしている。孔隙は少なくかたまっている。黄褐色土のブロックごく僅かながら含まれている。
 6層 10YR 5/4~10YR 5/2 に近い黄褐色、やや粘質。孔隙の多い部分と少ない部分とが斑状にある。細かな炭化物粒が塊状に入る。
 7層 10YR 5/4~10YR 5/2 に近い黄褐色~褐色、粘性は少なく孔隙も多い。僅かにシラスを斑状に含む。炭化物粒を含む。

第10図 第7号方形竪穴状遺構 (SKI07) 実測図



- 1層 10YR 7/2 黒褐色、軟かい炭化物混入、浮石少量混入。黄橙色土ブロック状に混入。
- 2層 10YR 7/2 におい黄褐色、軟質の暗褐色土。軟かい、黄褐色土はブロック状に多量。その他全体的に見られる。浮石少量混入。
- 3層 10YR 7/4 におい黄褐色、軟かい。地山土（黄橙色土～黄褐色土）を主体に軟質の暗褐色土混入。炭化物混入。
- 4層 10YR 7/4 暗褐色プラプラと軟かい。1層と色彩的には似ているが、黄橙色土が4層では粉末状に入っている。炭化物混入。
- 5層 10YR 7/4 におい黄褐色3層と似ているが、5層は黄橙色土がほとんどであり、やや硬くしまっている。

第11図 第9号方形竪穴状遺構 (SKI09)、地山流失部分実測図

る。それぞれP1:39.5cm, P2:57.5cm, P3:31.5cm, P4:48.5cm, P5:23.5cm, P6:41.5cm, P7:72cmの深さがある。SKI05では遺構の東西方向の中軸に沿って2つの柱穴がある。西側のP8は17cm、東側のP9は20cmの深さがある。両者とも残っている掘り込みが浅いため覆土もごく薄い、その色調はやや黄褐色ぎみの灰褐色であり、SKI06では幾分暗褐色に近い。出土遺物はない。

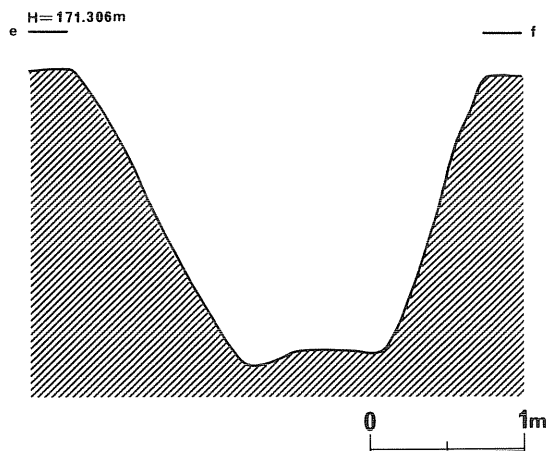
(6) 第7号方形竪穴状遺構 (SKI07) [第10図、図版5, 6]

郭上面調査区の北縁、I11グリッドで検出した。平面形は北西—南東に長い略方形を呈する。短辺中点を結んだ中軸線の長さは456cm、それと交わる長辺間を結ぶ中軸線の長さは294cmある。短辺間の中軸線の方向は磁北から53度西に寄っている。遺構中央部での深さは92cmと深い。南壁の南西隅によった箇所から、幅90cmの張り出し部が160cmのびている。遺構底面から30cm程上の南壁途中ではじまるが、最初25度程の傾斜でのぼり中程で10度前後のさらに緩い傾斜に変わる。柱穴は短辺間を結ぶ中軸線上に3箇所と南西隅に1箇所あるが、それぞれP1:27cm, P2:28cm, P3:23cm, P4:13cmの深さがある。覆土は黄褐色を帯びた灰褐色を呈するが、その中程から遺構の底面にかけては、覆土の堆積する水平方向に厚さ2~3cmの炭化物が途切れながらも認められた。また覆土下部には黄褐色土がブロック状に混じっている。また遺構内覆土の上層には直径5~6cmの円礫が多く含まれ、底面から20~40cm上位には径15~20cmの河原石が5個あった。遺物としては、東壁際の覆土の中程から焼け残った炭化材〔図版14-2〕が出土している。材は直径20cmの丸太を6分割した程の大きさで長さ50cmと20cmの2本がある。この材の出土したのとほぼ同じレベルの南壁の際から石鉢〔第21図6、図版14-1〕が出土している。東壁はSK02の西壁と接しているが、重複は認められなかった。

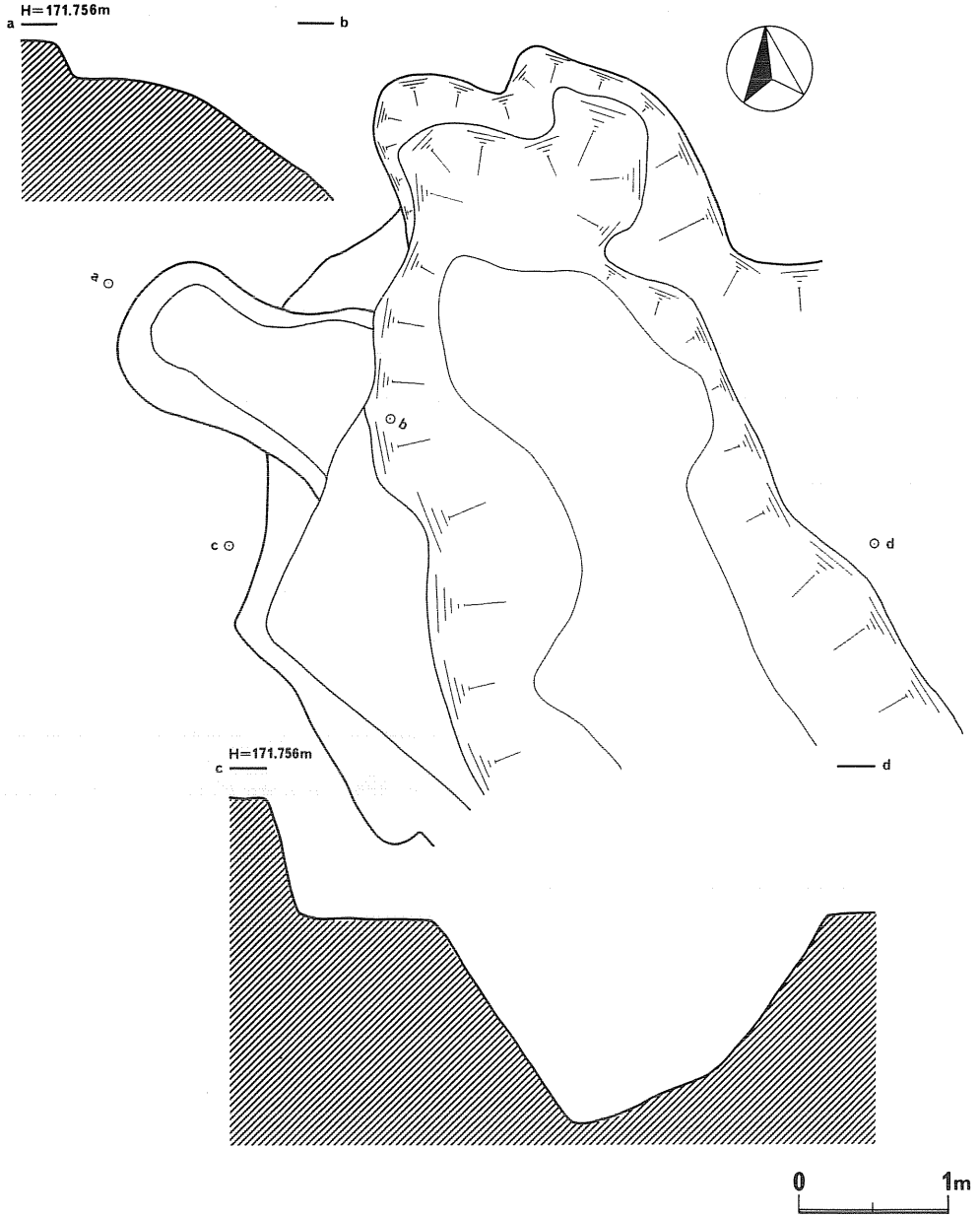
(7) 第8号方形竪穴状遺構 (SKI08) [第6図、図版5]

調査区南縁のK8グリッドで検出された。遺構の南側部分は郭南側の斜面によって削り取

られている。北側の壁の長さは198cm、西側の壁は斜面に切られたところまでの長さが225cmある。したがって復元される平面形は北東—南西に長い方形と推定される。遺構中央部での深さは49cmである。柱穴は東壁に沿って2箇所、西壁に沿って3箇所ある。それぞれの深さはP13:18.5cm、P14:47cm、P15:21.5cm、P16:6cm、P17:18cmである。西側壁の北寄りの部分から遺構本体との接続部幅60



第12図 地山流失部分断面図 (第11図左上)



第13図 第10号方形竪穴状遺構 (SKI10)、地山流失部分実測図

cmの張り出し部が100cm程のびる。遺構底面から25度前後の傾斜でのぼり、徐々に傾斜を緩めている。この張り出し部は西側にあるSKI01の覆土を切り込んで作られている。覆土は黄褐色ぎみの灰褐色を呈するが、下部ではやや暗い色調となる。また張り出し部の下にSKI01に関するピットがあるが、それには黄褐色土が埋まっていた。遺構内からは開元通宝、熙寧元宝の銅銭2枚〔第18図11、12、図版10下11、12〕が出土した。

(8) 第9号方形竪穴状遺構 (SKI09) [第11, 12図、図版6]

調査区の東端、E 8グリッドにある。平面形は北東—南西に長辺をもつ長方形である。東西の長辺、南北の短辺の midpoint を結んだ中軸線はそれぞれ356cm、464cmの長さがある。南北壁に沿った辺の midpoint を通る中軸線は磁北から22度東に寄った方向にある。北、東、西の壁は十分な高さがあり、遺構中央部では45cm程あるが、南壁では10cm程の立ち上がりしかない。この南壁の外側には幅16cm、深さ5cm前後の浅い溝の痕跡がある。遺構中央からやや東によって164cm×130cmの長方形に一段低い部分がある。遺構覆土はこの部分まで連続しており、SKI09内に設けられたなんらかの施設と推測される。遺構底面とは20cm前後のレベルの差がある。また西壁の北寄りにも、西側に張り出して長さ170cmの方形に一段下がった部分がある。SKI09の底面からは約20cm低くなっているが、この部分の底面には7個の石がありSKI09とは別の遺構の可能性もある。柱穴は南壁にそって2箇所、西壁中央に1箇所、北壁中央からやや内に入ったところに1箇所、遺構中央に1箇所の計5箇所に確認された。南壁側のP1、P2と北壁側のP5は柱穴の上面がひろがり、SKI04と同じく柱が抜き取られた可能性もある。P1:18.5cm, P2:46cm, P3:26cm, P4:48cm, P5:15.7cmの深さがある。北西、北東、南東の各隅の柱穴は確認できなかった。覆土は上層の一部がやや暗い色調を呈する他は黄褐色ぎみの灰褐色が基色となっている。SKI09の北西隅には北側斜面にむかって開く地山の流失部分がある。上面幅280cm、底面幅90cm、深さ160cmと大きく、L字形に屈曲してSKI09の北西隅と重なる。底面には50cm×40cm×20cmの石が1個と径15~20cmの河原石が3個あった。

(9) 第10号方形竪穴状遺構 (SKI10) [第13図]

調査区の南縁、I 8グリッドで検出した。当初SKI10と重複する地山流失部分の輪郭の一部としていたが、地山流失部分を掘り進むにつれて遺構の底面、張り出し部分などが次第に明らかになった。遺構の大半は地山流失部分および郭南側の斜面との切り合いで失われ、わずかに残っていた遺構の西側と張り出し部分が確認されたにとどまった。残った部分から推定するかぎり、平面形は長方形で、その規模がSKI03、SKI07と同じ程度とすれば北西—南東に長く、したがって張り出し部は短辺側についたSKI03と同じ形態を示すと思われる。遺構内の西側一画での掘り込みは80cm前後ある。張り出し部は中央で幅90cm、長さは170cmである。遺構の底面から40度前後であがり、上部では20度前後と緩くなっている。地山流失部分とともに遺構の覆土を掘りあげていったため、その断面の観察はできなかったが、概ねやや暗い灰褐色を呈している。SKI10をきっている地山流失部分は郭上面に4箇所あるなかでも最も大きい。南側の斜面から郭上面に5mほどのびている。斜面に開く箇所で、上面の幅320cm、底面幅130cm、深さ100cm前後である。

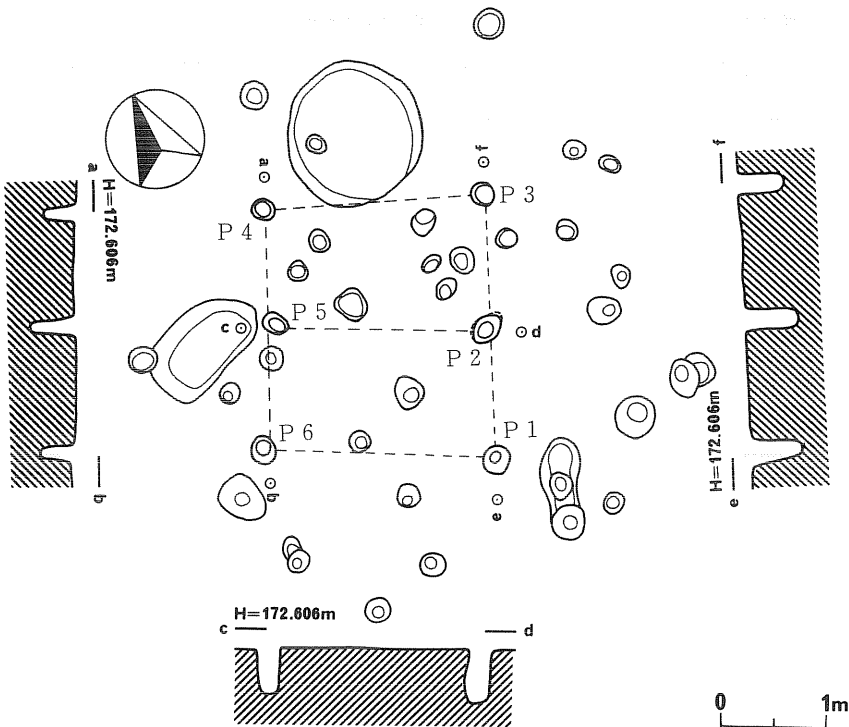
(10) 第11号方形竪穴状遺構 (SKI11) [第14図]

調査区西側の柱穴群の分布するN11グリッドにある。図面上の復元でみつかった遺構であるが、柱穴の配置、軸線の方向からSKI01、02、04と同じ平面形態の方形竪穴遺構と判断された。遺構上部は削られて失われたと思われる。P1-P3の間248cm、P3-P4の間208cm、P4-P5の間224cm、P6-P1の間216cmと、その規模は比較的小さく、竪穴の輪郭もSKI02と同程度のものと推定される。P2-P5を結ぶ中軸線は磁北から61度西に寄った方向にある。柱穴の深さはP1:48cm、P2:49cm、P3:42cm、P4:28cm、P5:44cm、P6:32cmである。

以上の方型竪穴状遺構については第6章でもまとめる。

2. 土 坑

13基検出された土坑にはSK02、SK03のような大型のものもあるが、大半は径2m以下の大きさしかない。土坑規模、埋土の状態、出土遺物の内容から土壙墓と推定される例(SK01、SK02)もある。調査区では北縁によった箇所(SK02、SK03、SK04、SK08、SK12、SK13)や、中央部南側に寄って(SK01、SK10、SK11)分布するほか、東端近く(SK09)や西側の柱穴群の密集域(SK05、SK06、SK07)にも存在する。



第14図 第11号方形竪穴状遺構 (SKI11) 実測図

(1) 第1号土坑(SK01)〔第15図、図版7〕

調査区南縁近く、J8グリッドで検出。各辺中軸線の長さは南北216cm、東西180cmである。南壁、北壁を分ける中軸線は26度東に傾く。土坑中央部では40cm前後の深さがある。埋土は褐色がかかった灰褐色を呈する部分が主で、下部では褐色土、炭化物の細粒が縞状に堆積している。土坑内からは刀子〔第23図-5、図版12-2〕、鉄釘〔第22図-1、図版11-6〕、鈴〔第22図-1、図版11-4〕、刀柄金具〔第22図-3、図版11-5〕、銅銭(皇宋通宝)〔第21図-13、図版10-13〕、吹子羽口〔第24図-23、図版13-1,2,3〕が出土している。

(2) 第2号土坑(SK02)〔第15図、図版7,8〕

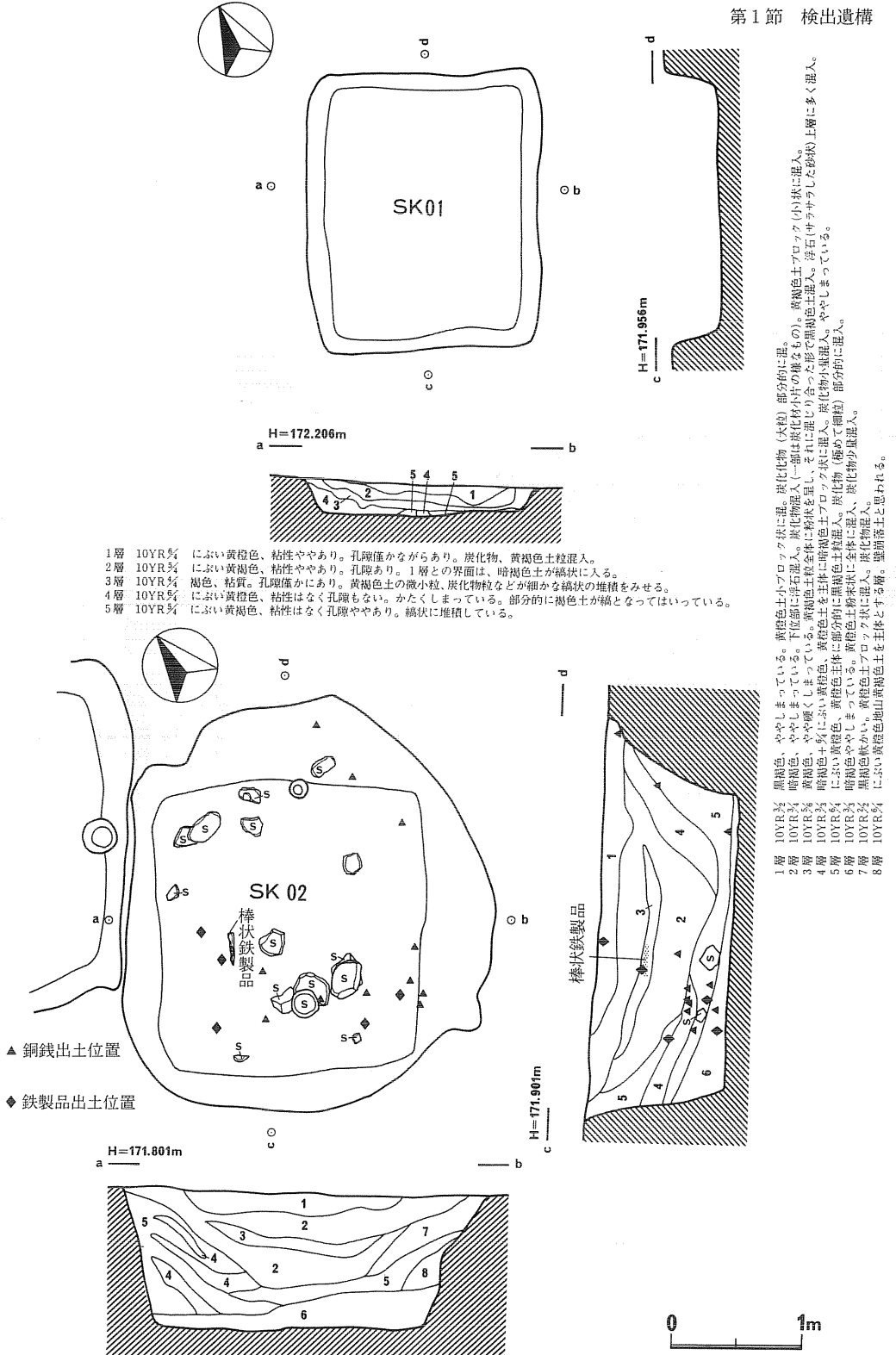
調査区北縁に近いI10グリッドで検出。SKI07東壁と本土坑の西壁が接している。確認面では円形の輪郭としてあらわれたが、埋土を掘りあげた結果、底面は各辺の中軸線の長さが228cmと200cmの、北東-南西に長い方形となることがわかった。確認面で円形にあらわれていたのは北東側と南東側の開口部がやや広く掘られていたためで、南西側と北西側ではほぼ底面の形に沿っている。掘り込みは深く、中央部で100cm前後である。確認面の輪郭北側に柱痕跡があり、その下の底面の北東縁中央に1箇所、深さ22cmの柱穴があった。柱穴を通る中軸線は42度東に傾く。埋土の上層は黒褐色～暗褐色の土でしめられ、下層は黄褐色土と地山の灰褐色土が炭化物と混じって互層をなし、縞状の堆積状態を示す。土坑内下部には12個河原石があったほか、埋土の上層から下層にかけて苧引金〔第23図-1、図版11-1〕、鎌〔第23図-3、図版11-2〕、棒状鉄製品〔第23図-4、図版12-1〕、吹子羽口〔図版13-4〕、銅銭10枚〔第19図-1～10、図版10-1～10〕などの遺物が出土している。

(3) 第3号土坑(SK03)〔第16図、図版18〕

調査区の北縁、G9グリッドで検出。底面160cm×200cmの北西-南東方向に長辺をもつ長方形である。北壁、西壁には不整形に張り出した一段高い部分がある。張り出していない南側、東側の開口部でも、底面よりは20cm前後外側に開いている。底面中央部での深さは100cm程である。覆土は張り出した部分も土坑の底面もほぼ等しく水平に近い堆積状態をみせている。主に褐色土が中心であるが、底面近くと遺構東側の一面に黒褐色土の堆積がある。遺構下部から砥石〔第24図-5、図版13-8〕が出土したほか、上層から環状の鉄製品〔図版11-7〕が出土している。

(4) 第4号土坑(SK04)〔第16図、図版9〕

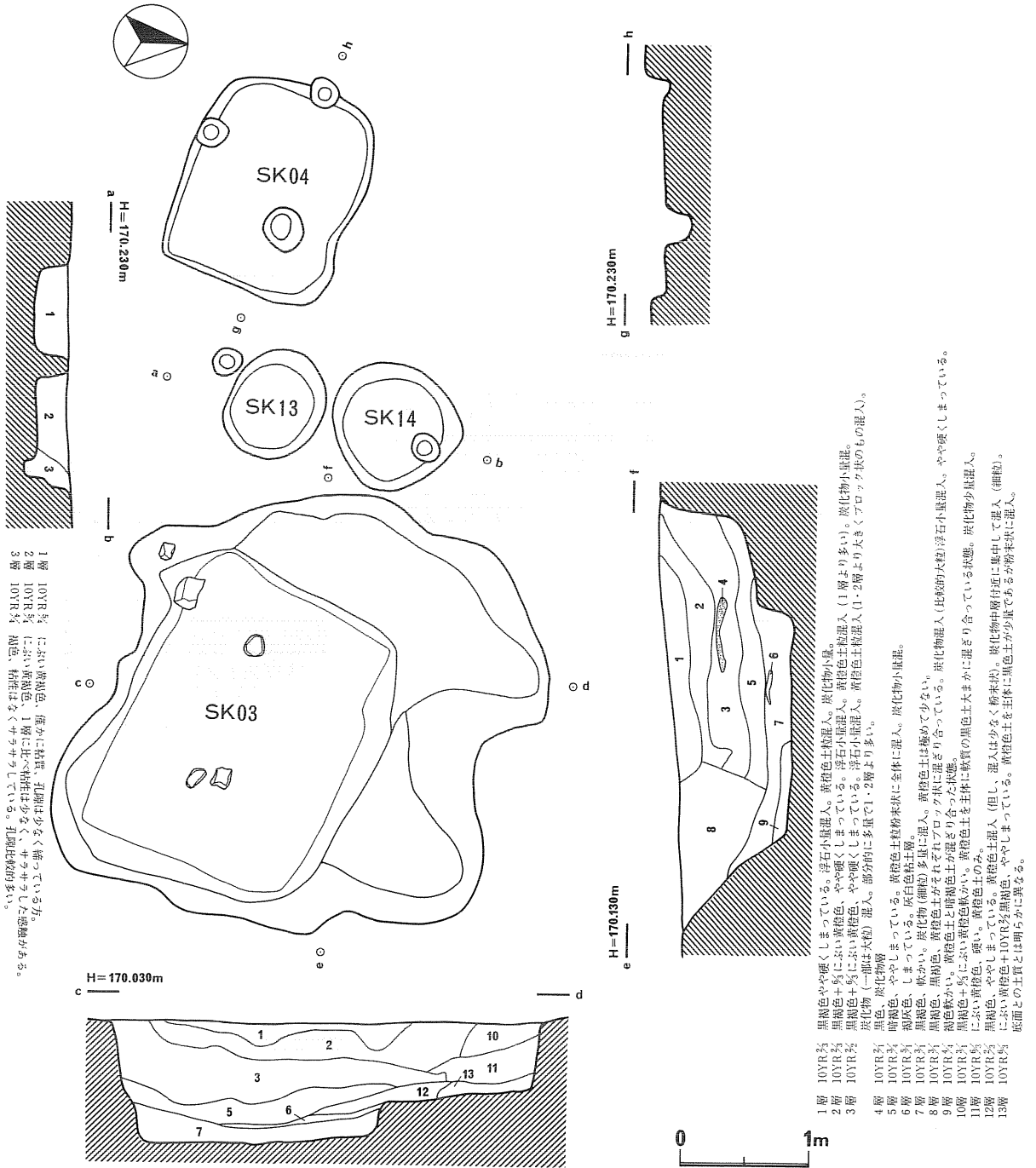
第3号土坑の東側、H9グリッドで検出。北西-南東方向に長く165cm、直交して135cmを測る。東壁、西壁をわける中軸線は磁北から72度西へ傾く。西壁上にある柱穴が確認面で柱痕跡をのこしていた。残っていた掘り込みは浅く10cm前後しかない。覆土は1層でやや黄褐色ぎみの灰褐色である。出土遺物はない。



- 1層 10YR 8/4 黄褐色、粘性ややあり。孔隙僅かながらあり。炭化物、黄褐色土粒混入。
 2層 10YR 8/4 黄褐色、粘性ややあり。孔隙あり。1層との界面は、暗褐色土が縞状に入る。
 3層 10YR 8/4 褐色、粘質。孔隙僅かにあり。黄褐色土の微小粒、炭化物粒などが細かな縞状の堆積をみせる。
 4層 10YR 8/4 黄褐色、粘性はなく孔隙もない。かたくなっている。部分的に褐色土が縞となつてはいつている。
 5層 10YR 8/4 黄褐色、粘性はなく孔隙ややあり。縞状に堆積している。

- 1層 10YR 2.5/2 黒褐色、ややしまつている。炭化物小アフロック状に混入。炭化物(大粒)部分的に混入。
 2層 10YR 2.5/2 暗褐色、ややしまつている。下部に浮石混入。炭化物混入(一部は炭化物小片の塊を混入)。炭化物小アフロック(小塊)に混入。
 3層 10YR 2.5/2 暗褐色、やや硬くしまつている。炭化物混入(一部は炭化物小片の塊を混入)。炭化物小アフロック(小塊)に混入。
 4層 10YR 2.5/2 暗褐色、やや硬くしまつている。炭化物混入(一部は炭化物小片の塊を混入)。炭化物小アフロック(小塊)に混入。
 5層 10YR 2.5/2 暗褐色、やや硬くしまつている。炭化物混入(一部は炭化物小片の塊を混入)。炭化物小アフロック(小塊)に混入。
 6層 10YR 2.5/2 暗褐色、やや硬くしまつている。炭化物混入(一部は炭化物小片の塊を混入)。炭化物小アフロック(小塊)に混入。
 7層 10YR 2.5/2 暗褐色、やや硬くしまつている。炭化物混入(一部は炭化物小片の塊を混入)。炭化物小アフロック(小塊)に混入。
 8層 10YR 2.5/2 暗褐色、やや硬くしまつている。炭化物混入(一部は炭化物小片の塊を混入)。炭化物小アフロック(小塊)に混入。

第15図 第1号土坑(SK01)、第2号土坑(SK02)実測図



第16図 第3号土坑(SK03)、第4号土坑(SK04)、第13号土坑(SK13)、第14号土坑(SK14) 実測図

(5) 第5号土坑(SK05)〔第18図、図版9〕

調査区の西側、柱穴群が密集して分布しはじめるM10グリッドで検出。南北壁、東西壁を分ける中軸線の長さはそれぞれ154cm、150cmである。覆土は1層でわずかに黄褐色がかかった灰褐色土である。出土遺物はない。

(6) 第6号土坑(SK06)〔第18図〕

調査区の西端、N13グリッドで検出。一部調査区外にかかる。西側が東側よりも狭い、北西-南西に長い方形になるとおもわれる。底面南西隅に23cm前後の柱穴が2つある。覆土は1層で褐色土である。出土遺物はない。

(7) 第7号土坑(SK07)〔第18図、図版9〕

調査区の北西隅、M14グリッドで検出。一部調査区外にかかる。北西-南東に長辺をもつ長方形となる。北西-南東の中軸線で160cm、北東-南西の中軸線で150cm前後になろうかと思われる。北東-南西の中軸線が通る壁の部分に一对の柱穴がある。南北それぞれ28cm、12cmの深さがある。覆土は黄褐色がかかった灰褐色土が占めている。底面南側から有孔石製品〔第24図-4、図版13-6〕が出土している。

(8) 第8号土坑(SK08)〔第18図〕

調査区の東端に近い北縁、G9グリッドで検出。東側には北側斜面に向かって開く地山の流失部分がある。平面形は北西-南東に長い方形を呈する。北西および南西壁を分ける中軸線の長さは137cm、それと直交する軸線は102cmの長さがある。中央部での深さは80cmである。北西-南東の中軸線は75度西に傾く。覆土は黄褐色がかかった灰褐色が基色となっている。出土遺物はない。

(9) 第9号土坑(SK09)〔第18図、図版9〕

調査区の東端に近い南縁、G8グリッドで検出。SKI09とSKI10のほぼ中間位置にある。平面形は径205cmの円形を呈する。底面は開口部より幾分広がる。中央部での深さは70cmである。覆土は炭化物の薄層が部分的にはいった黄褐色～灰褐色土で占められる。覆土中から土師器の破片〔図版15〕が出土しているほか、火撃ち石〔図版13〕が出土している。

(10) 第10号土坑(SK10)〔第18図〕

調査区のほぼ中央、J9グリッドで検出。径125cmの円形を呈する。中央部での深さは25cmである。底面の南寄りに炭化物の広がる箇所がある。覆土はやや黄色味を帯びた灰褐色である。土師器皿か坏の底部〔図版15〕が出土している。

(11) 第11号土坑(SK11)〔第18図〕

SK10の西側、K10グリッドで検出。南側にはSKI01がある。SKI01との間には新しい時期のSK12があり、SK11の南側壁をきっている。径155cmの円形で、中央部の深さは20cmである。

第4章 調査の記録

底面東側に深さ17.5cmの柱穴がある。覆土はやや暗い灰褐色である。出土遺物はない。

(12) 第12号土坑 (SK12) [第18図]

SK11南側、K11グリッドで検出。その北側でSK11、南側でSKI01を切る。長方形の平面形をもつ。東西壁を分ける中軸線の長さは187cm、南北壁を分ける中軸線の長さは165cmである。南北壁を分ける中軸線は磁北から80度西に傾く。中央部での深さは25cmである。覆土はやや暗い灰褐色を呈する。出土遺物はない。

(13) 第13号土坑 (SK13) [第16図]

H 9グリッドで検出。SK03の北西側に隣接している。平面形は径80cmの円形である。中央部の深さは25cmである。覆土はやや暗い灰褐色土である。出土遺物はない。

(14) 第14号土坑 (SK14) [第16図]

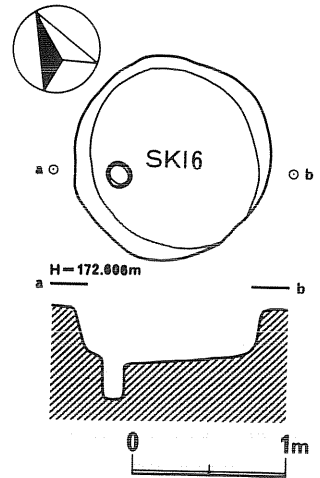
H 9グリッドで検出。SK03の西側に隣合い、かつSK13の北側に位置する。平面形は径125cmの円形で、中央部の深さが27cmである。底面北側に深さ10cmの柱穴がある。覆土はSK13と同じくやや暗い灰褐色を呈する。出土遺物はない。

(15) 第15号土坑 (SK15) [第6図]

L 7グリッドにあり、SKI02の北西隅をきる。平面形は北西-南東の中軸線の長さ90cm、南西-北東の中軸線の長さ102cmの隅丸の長方形である。中央部での深さは18.5cmである。覆土はSKI02よりも明るい灰褐色土である。

(16) 第16号土坑 (SK16) [第17図]

N 11グリッドで検出。調査区西側の柱穴群の分布するなかにある。径134cmの円形で、中央部の深さは34cmある。底面西側に20cmの深さの柱穴がある。覆土は黄褐色を帯びた灰褐色。



第17図 第16号土坑(SK16)実測図

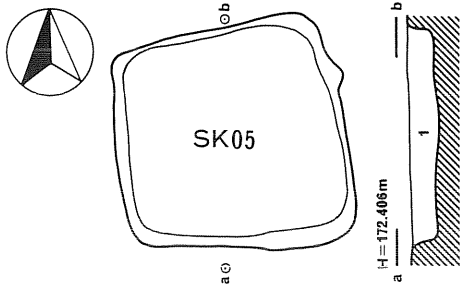
3. 溝 [第5図、第19図]

調査区の西側、L 12、M12グリッドにある。幅26cm、深さ40cm前後で東北-南西の方向に5.8mのびている。覆土は暗褐色である。柱穴群がこの溝を切っている。

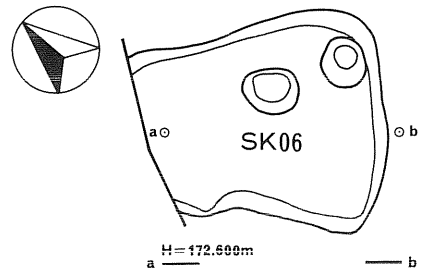
4. 柱穴群および掘立柱建物跡

調査区の西側に多く分布する。東側にも数箇所列をつくるものがあるがそれらは、主に方形竪穴状遺構に付随すると思われる。直径15cmから30cmのものが多く、深いものでは70cmに達す

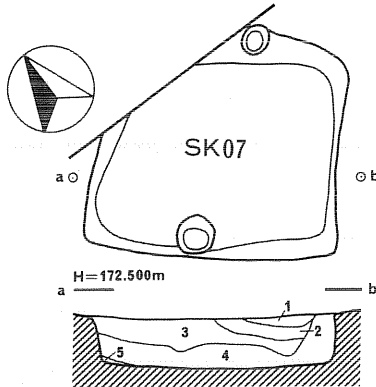
第1節 検出遺構



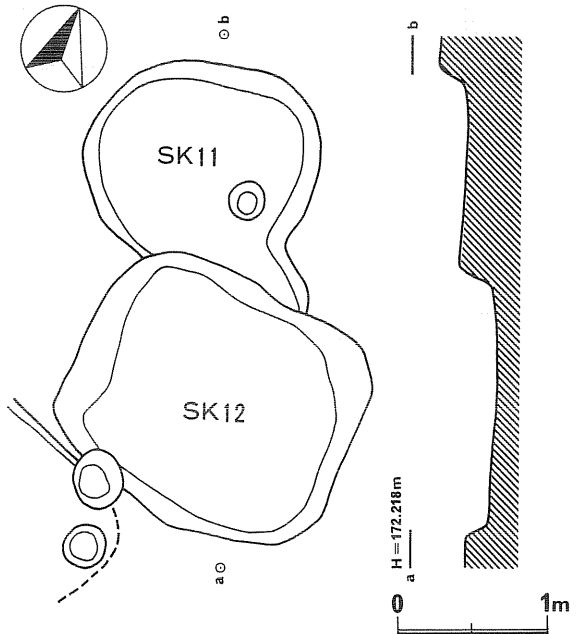
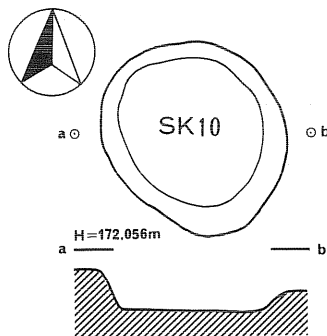
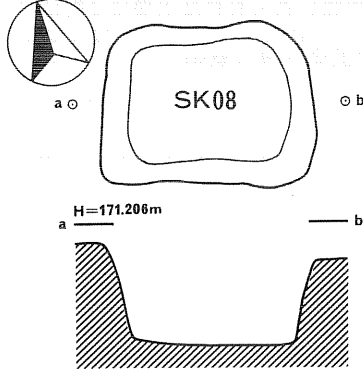
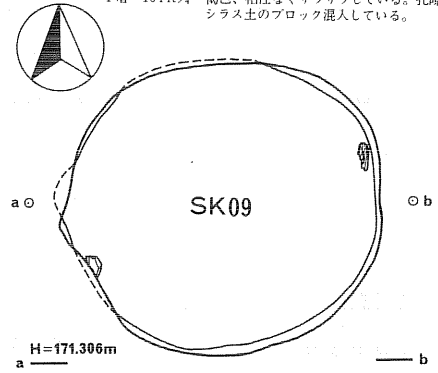
1層 10YR5/1にふい黄褐色、僅かに粘質。孔隙は比較的小く、しまっている方である。



1層 10YR5/1 褐色、粘性的くサラサラしている。孔隙多い。シラス土のブロック混入している。



1層 10YR5/1 にふい黄褐色、粘性は小さくサラサラしている。孔隙も多い。
 2層 10YR5/1 にふい黄褐色、粘性はない。孔隙は少なくしまっている。硬い。
 3層 10YR5/1 にふい黄褐色、粘性僅かにある。孔隙多く軟い。炭化物小片を含む。
 4層 10YR5/1 にふい黄褐色、粘性なく孔隙もない。かたくしまっている。シラス再堆積土。
 5層 10YR5/1 にふい黄褐色、粘質。孔隙あり。軟い。



第18図 第5号土坑(SK05)、第6号土坑(SK06)、第7号土坑(SK07)、第8号土坑(SK08)、第9号土坑(SK09)、第10号土坑(SK10)、第11号土坑(SK11)、第12号土坑(SK12)実測図

第4章 調査の記録

る例もある。掘立柱建物跡は第3章第2節で述べたように図上で復元された。

(1) 第1号掘立柱建物跡 (SB01) [第19図]

N10、N11グリッドで検出された。梁行1間(延長、南-228cm)、桁行2間(延長、西-400cm)の規模である。南北梁間の中軸線は磁北から7度東に寄った方向にある。柱穴の深さはP1:60cm、P2:23cm、P3:23cm、P4:50cm、P5:31cm、P6:52cmである。平均の柱間寸法は、梁行で226cm、桁行で197cmである。桁行2間のうち南側の桁が北側よりもやや長い。

(2) 第2号掘立柱建物跡 (SB02) [第19図]

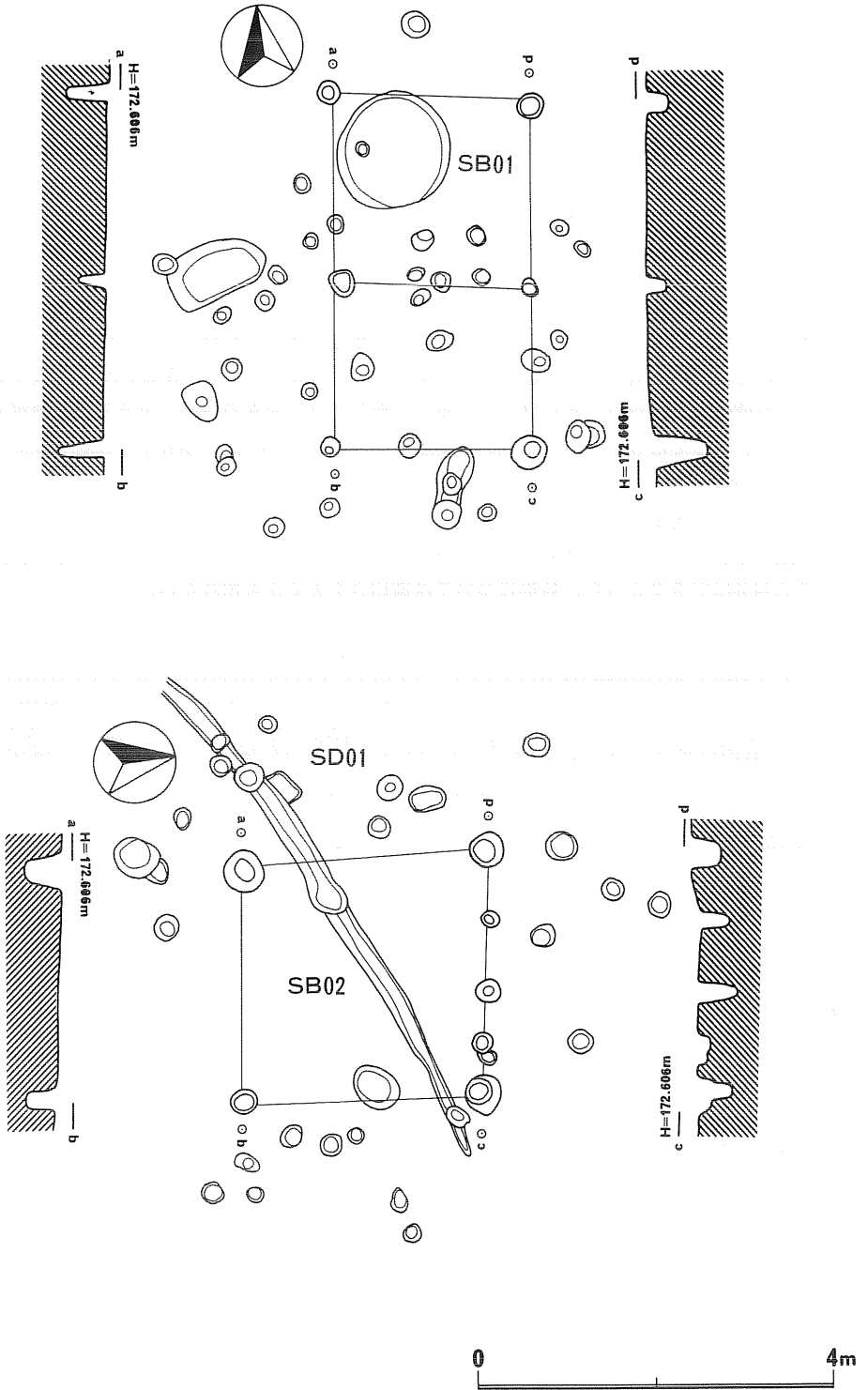
M12グリッドで検出された。桁、梁とも1間ずつである。北側の梁間を結ぶ線上に4個の柱穴が並ぶ。柱穴の深さはP1:31cm、P2:22cm、P3:35cm、P4:41cm、P5:20cm、P6:28cm、P7:46cm、P8:31cmである。平均の柱間寸法はP1-P4、P2-P3の梁で264cm、P1-P2、P4-P3の桁で276cmある。南北の梁間を分ける中軸線は磁北から7度東に寄った方向にある。

5. 南側斜面および段築部 [第20図]

第3章第2節で述べたように、南側斜面はHラインに沿ったトレンチをいれ、段築部はそれを拡張するかたちで調査した。

トレンチ内では表土から地山まで60cm前後の厚さがあり、断面にあらわれた土層は3層に分層できる。いずれも地山の火山灰の再堆積層で、明暗の違いが主な分層の基準となった。第1層は、郭上面の調査区第I層から連続し、斜面、段築部からさらにその下の斜面上を覆っている。30~40cmの厚さがある。色調は郭上面での第I層よりもやや暗い褐色~暗褐色である。表面にある灌木などの根が多くはいっている。第I層に比較して僅かに粘質である。第2層は郭上面の南縁から2m程降りた箇所からはじまり、段築部との接続箇所から2m程上ったところできれている。斜面中央で20cm程の厚さがある。第1層よりもやや明るく灰褐色~褐色である。粘度は小さい。第3層は郭上面の南の縁から3m程降りたところからはじまり、段築部の上まで連続している。厚さは20cm程ある。色調は第2層と同じく灰褐色~褐色である。径10~20mmの軽石が多く含まれていて、粘度は小さくサラサラした感触がある。郭上面から段築部までは10.5mの長さがある。この間に遺構は認められなかった。傾斜角は60度前後ときわめて急である。

段築部では地山を削りだした空堀と土塁を検出した。空堀は土塁の上端をその南端として測ると、上面幅280~300cm、底面での幅が180~210cm、深さは60cmである。断面は逆台形となる。底面の北側に沿って幅30cm、深さ20cmの溝が1条検出された。溝は斜面と段築部の屈曲にそって東西に走る。溝の幅は西側で広く、東側で狭い。覆土は下層が地山の再堆積土で、灰褐色を呈し、堅く締まっている。上層はこの地山の再堆積土に暗褐色土が混じった幾分暗い色調を基色とし、その中に黒色土や黄褐色土が縞状に堆積している。地山を削り出して作った土塁は、



第19図 第1号掘立柱建物跡(SB01)、第2号掘立柱建物跡(SB02)、第1号溝跡(SD01)実測図

空堀底面の南の縁をその基底部とすると幅100cmで、高さは空堀の深さと同じく60cmである。土塁の南側は下段の段築部へ60度の急な傾斜で続いている。

下段の段築部が上段の段築部からの斜面と接続する箇所の下では、土塁から続く地山の傾斜が30度と緩いものになっている。また上段の空堀底面にあるのと同じく1条の溝が検出された。溝は段築部に沿って東西に走る。溝の幅は30cm、深さは33cmである。下段の段築部の覆土は160cm前後の厚さで堆積している。

- 註1 中世城館跡から検出されるこの種の遺構については竪穴住居跡として扱われる場合と、竪穴遺構として奈良、平安時代の住居跡とは異なることを強調する場合がある。柱穴があり上屋がかけていたのは明らかだが、カマドを持たず厨房設備を欠く点で奈良、平安時代のものとは違った使い方をされたことも考えられる。しかしこれは通常の住居であることを否定するのではなく、ここでは竪穴住居の時期的な変遷の中での一つの形式と理解して記述する。
- 註2 藤本 幸雄「地形と地質」『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅰ』秋田県教育委員会1981(昭和56)年オレンジ色の軽石を含む層として記述されている。
- 註3 熊館第Ⅰ郭がつくられる時期以前の溝跡、または堀割りの末端部とも考えられるが、調査時にその判別はできなかった。名称については適切さを欠くかも知れない。

第2節 出土遺物

出土した遺物の量は少なく、整理用コンテナで一箱分しかない。少ない中でもほかの中世城館跡から出土しているのと同じような鉄製品や、銅銭があり、調査区の特徴を示している。これらの遺物はすべて郭上面調査区の出土遺物で、段築部からは遺物が出土していない。

1. 青磁碗〔第24図1、巻頭カラー図版〕

遺構外からの出土である。1/4ほどの破片で、断面に漆と思われる補修材の痕跡がのこる。器面にはやや細身の鎬のある蓮弁文が描かれている。釉は明るい粉青色を呈し、胎土は白色である。

2. 播鉢〔図版15-17〕

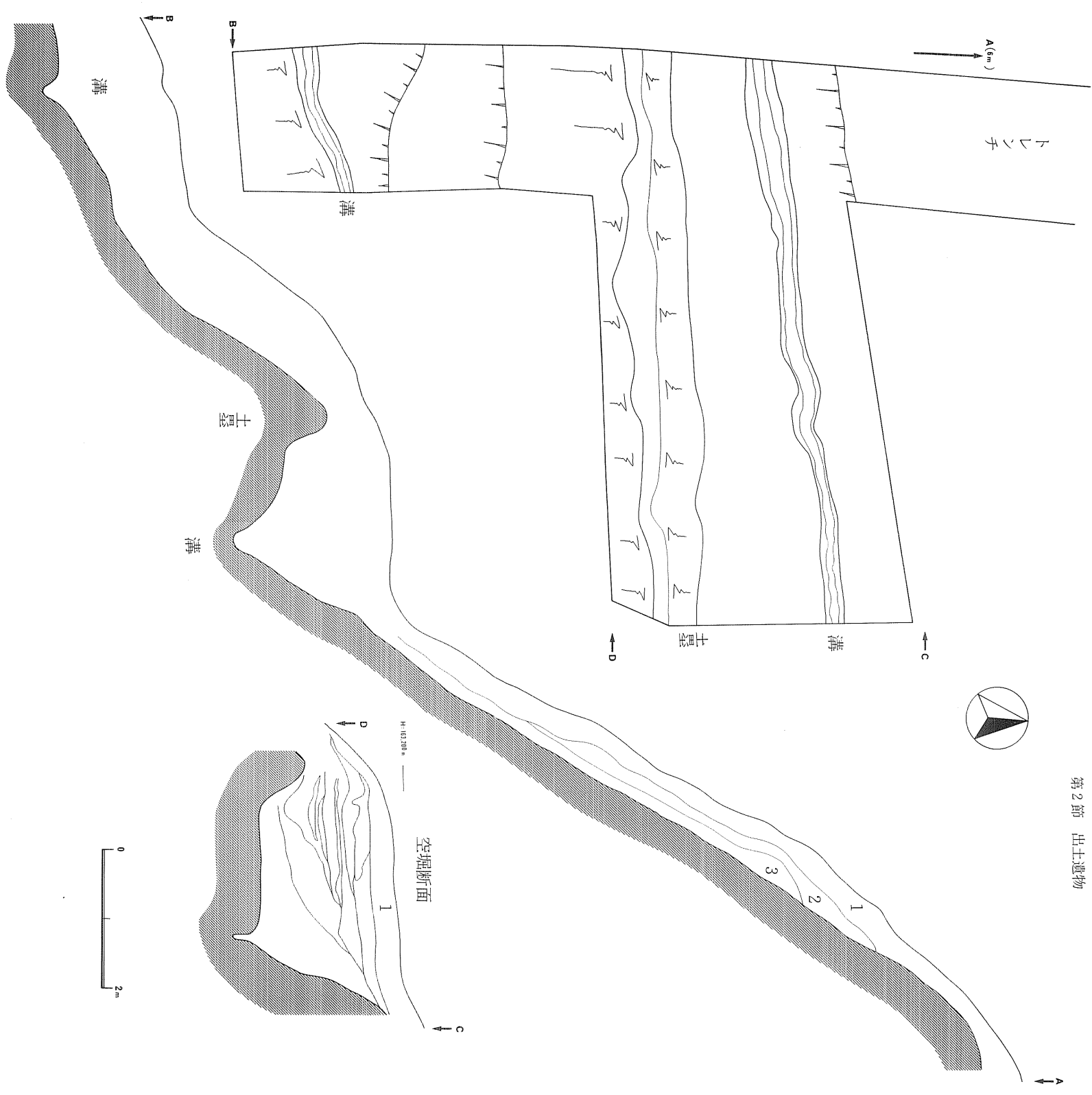
卸し目の間隔が広く、かつ深い。珠洲系の古い時期にあたる。

3. 土師器〔図版15-1~16〕

すべて破片である。甕の口縁部資料〔5~8〕と坏または皿の底部資料〔16〕がある。この底部は糸きり痕跡をのこしている。いずれの資料も胎土に砂粒がまじっていて、ケズリ調整時の傷が残る。黒ずんだ色調を呈する。

4. 吹子羽口〔第24図2,3、図版12-1~5〕

すべて破片である。平安時代の製鉄跡から出土するものに比べ薄い作りで、推定の内径4cm前後である。



第20図 南側斜面トレンチ断面、南側段築部分調査区平面図

5. 有孔石製品〔第24図4、図版13-6〕

角閃石や石英の斑晶の多く入った石でできている。重さは470gで、両面から直径15mmの孔が
あけられている。上部の半分を欠いている。類似品に竹製の簾などを編む際に使われた「こも
石」^(註1)として報告例がある。

6. 砥石〔第24図5、図版13-8〕

凝灰岩製である。4面ともが砥面として使われている。

7. 石鉢〔第24図6、図版14-1〕

安山質の石でできている。内外面にノミのような工具で撃ち欠きながら仕上げた跡がある。

8. 鉄製品〔第23図、図版24(うち5を除く)〕

植物繊維を掻き取るのに用いたとされる苧引金〔第23図1、図版11-1〕や、鎌〔同2,3〕、下
半分を欠損する鈴〔第22図2、図版11-4〕、断面が四角で両端の太さが違う棒状鉄製品〔第23図
4、図版12-1〕、柄の木質部をのこす刀子〔第23図5、図版12-2〕や釘、鍋などが出土している。^(註2)

9. 銅製品〔第22図3、図版11-5〕

刀の柄金具である。側に一対の目釘穴がある。中央に穴のあけられた菊花状の飾りがある。
反対側は欠失しているが、同じものがあつたと思われる。

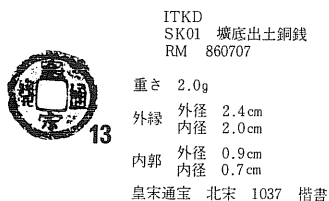
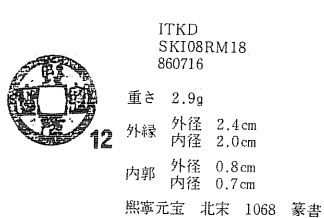
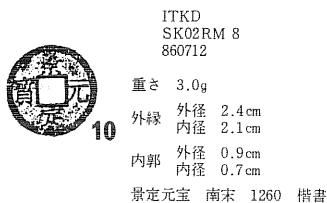
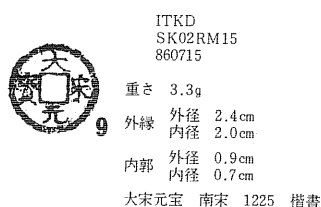
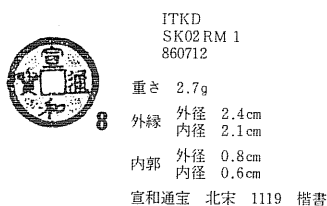
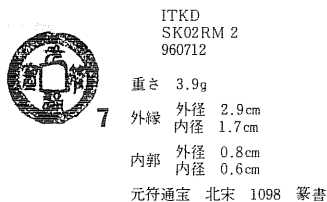
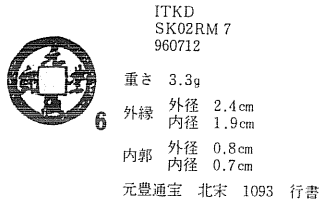
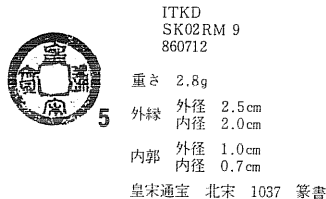
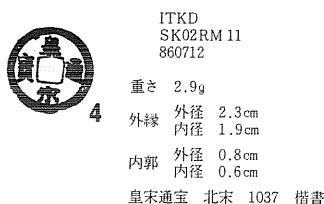
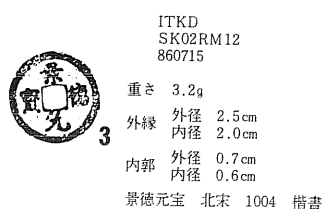
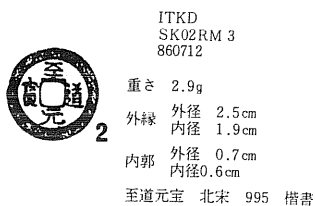
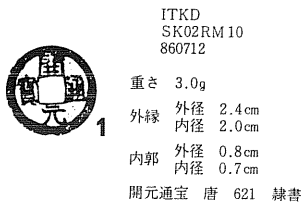
10. 銅銭〔第21図、図版10〕

すべて遺構内部からの出土である。銭銘、内郭、外縁とも明瞭で、北宋代の鑄造銭が中心で
ある。

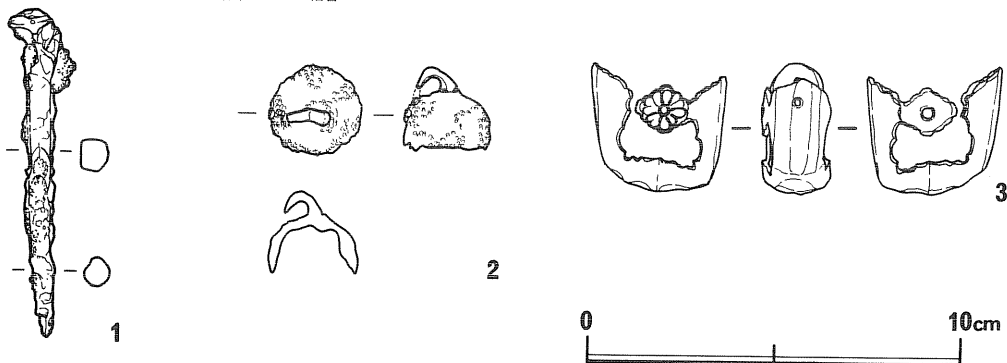
註1 工藤清泰「浪岡城Ⅷ—昭和58年度発掘調査報告書—」
浪岡町教育委員会 1984(昭和59)年

註2 不明鉄製品(工具の地金の可能性あり)として報告例がある。
工藤清泰「浪岡城Ⅵ—昭和57年度発掘調査報告書—」
浪岡町教育委員会 1984(昭和59)年

第4章 調査の記録

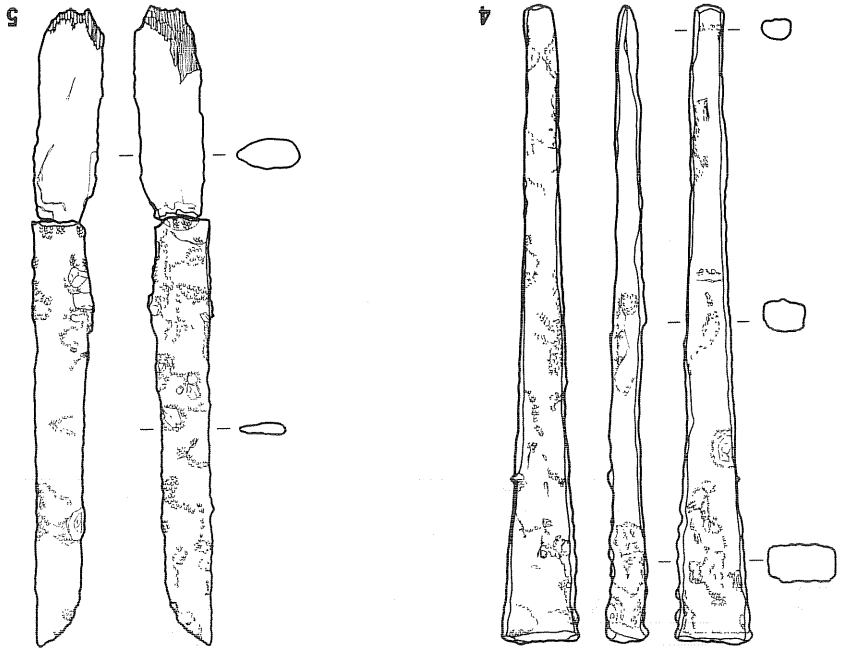
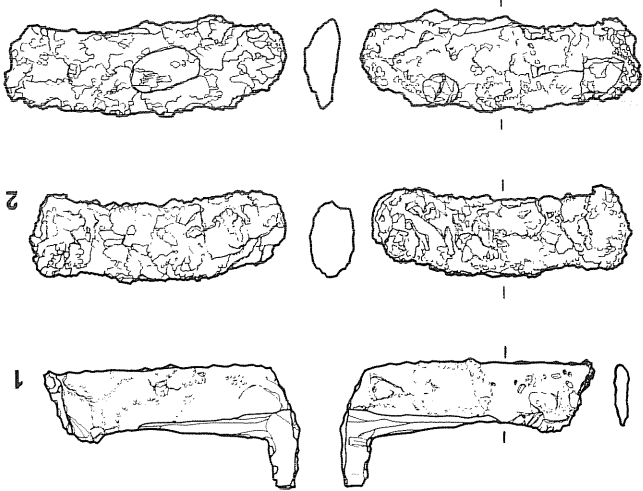


第21図 各遺構内出土銅錢

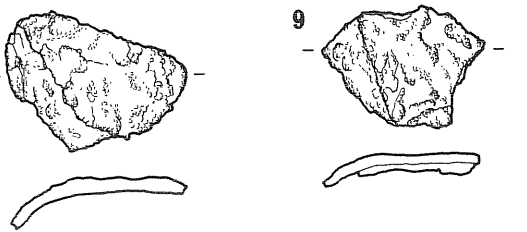


第22図 遺構内出土遺物(1)

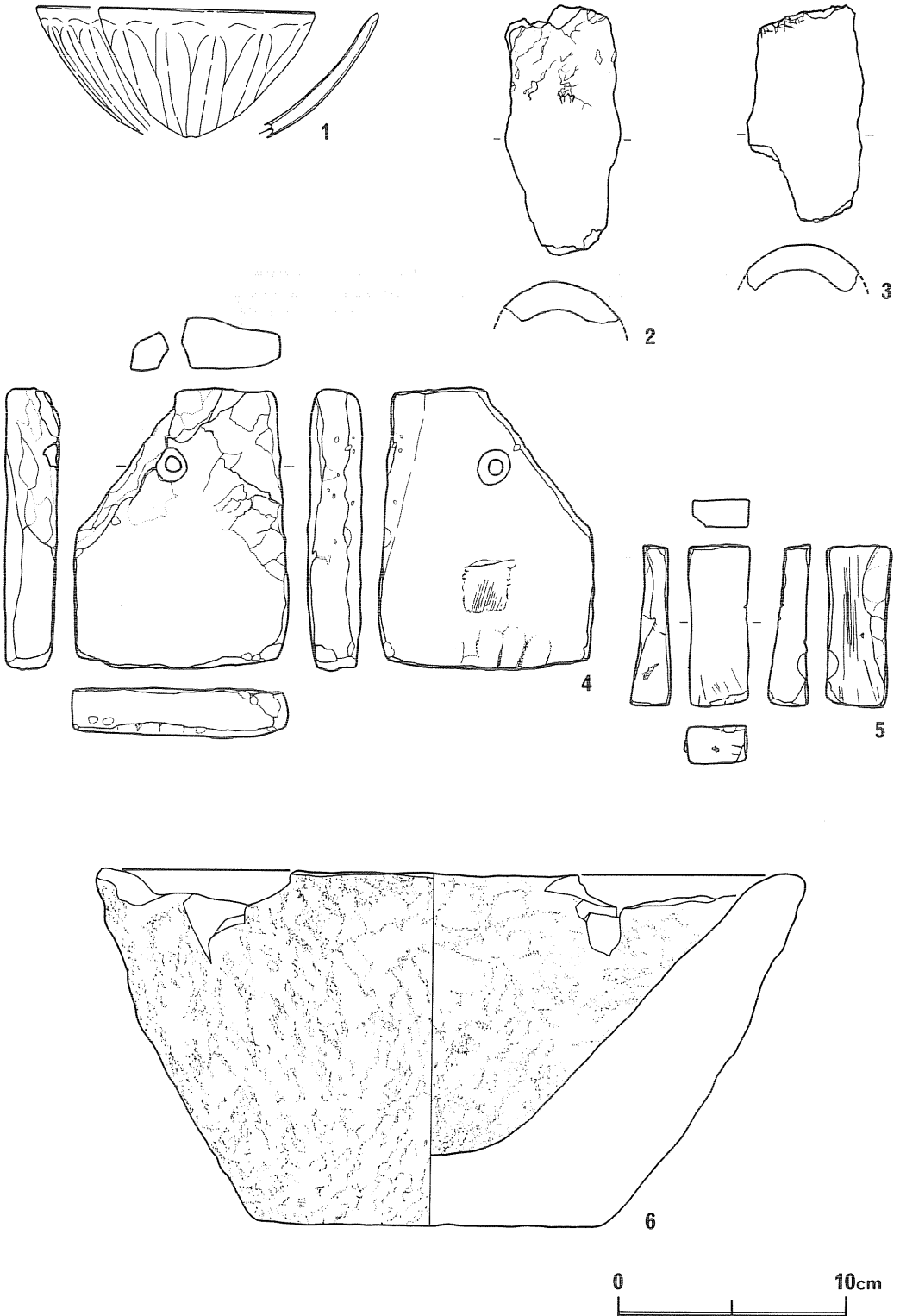
0 10 cm



0 10 cm



第23図 遺構内出土遺物(2)



第24図 遺構内出土遺物(3)

第5章 自然科学的分析

第1節 高瀬館跡出土炭化米計測結果

(パリノ・サーヴェイ株式会社報告)

(1) 試料・方法

高瀬館跡出土炭化米の、長さ・幅・厚さを測定した。遺跡は中世の城館址とされている。測定に先立ち、試料全量を4, 2, 1, 0.5mmの篩別した。4mmを越えるものはすべて種子がたがいに接着した塊であり、4～2mmのものは塊と破片、2～0.5mmのものはすべて破片であった。いずれも欠損部が認められ完形のものはないが、4～1mmのものうち比較的状态の良い80点について測定作業をおこなった。測定は、双眼実体鏡下でノギスを用いておこなった。

(2) 結果

測定結果を一覧表に示す(第2表)。各測定値の測定箇所は第25図に示した。種子はいずれも一部が破損していたが、その最大値を測定値とした。4～2mmの破片だけでも700個以上あり、全体の一割にもみえない個数を測定できたにすぎない。

一部に籾殻をつけたものや炭化した籾殻片もみとめられたが、その数は少なく、また塊となったものの接着面には籾殻が認められなかった。籾の状態ではなく、脱穀後の玄米(あるいは白米)の状態にあったものが炭化したものとする。

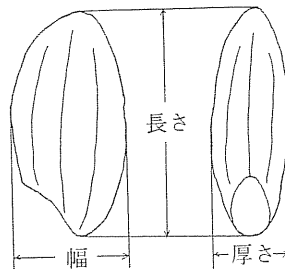
また、ごく少量ではあるが、ムギ類らしき種子も認められた。

種子はいずれも欠損部があり、いわゆる焼けぶくれの状態にあるものもあった。したがって、各測定値は炭化前の値とは異なっているが、得られた値の範囲は、長さが3.7～5.8mm、幅が1.6～3.3mmであった。これから長さ/幅の比を求めると、1.4～2.6となり、ほとんどが短粒種子(いわゆるJaponica type)形状を示すといえよう。ただし、イネのIndica、Japonica、Javanicaの3生態種は、籾型の長・短・大のほかに、芒の有無・浮毛の長短・脱粒性といった穎果の形質、葉身の広狭・葉色の濃淡・分けつの多少・草丈の高低・組織の硬軟といった植物体の形質、さらには低温抵抗性の強弱・耐旱性の強弱・フェノール反応の有無・塩素酸カリウムへの抵抗性の有無といった生理的特性によって総合的に判断されるものである(高橋 1982)。しかも粒形のみでこの生態種を判別することは、特に炭化種子の場合には、困難であるばかりか危険でもある。

引用文献 高橋 成人 1982「イネの生物学」, 214p., 大月書店, 東京

第2表 SKI07出土炭化米計測値

長さ	幅	厚さ	長さ	幅	厚さ	長さ	幅幅	厚さ
3.7	2.2	1.6	4.5	2.4	2.2	4.8	2.8	2.3
3.8	1.7	1.3	4.5	2.5	2.2	4.9	2.3	2.1
3.8	2.1	1.5	4.5	2.7	1.4	4.9	2.4	1.6
3.8	2.2	1.3	4.6	2.1	1.6	5.0	2.3	2.0
4.0	1.7	1.0	4.6	2.3	2.1	5.0	2.4	2.2
4.0	2.2	1.4	4.6	2.4	2.0	5.0	2.5	1.9
4.1	1.8	1.2	4.6	2.5	1.6	5.0	2.7	2.4
4.1	2.3	2.1	4.6	2.5	1.7	5.0	2.8	1.7
4.1	2.5	1.9	4.6	2.6	1.7	5.0	3.2	2.2
4.2	1.6	1.2	4.6	2.6	1.9	5.1	2.4	2.0
4.2	1.9	1.3	4.6	2.8	1.9	5.1	2.6	2.1
4.2	2.1	1.7	4.6	2.3	2.2	5.1	3.0	2.3
4.2	2.1	2.2	4.7	2.0	1.5	5.2	2.4	2.0
4.2	2.2	1.8	4.7	2.0	1.5	5.2	2.8	1.9
4.2	2.2	1.9	4.7	2.1	1.8	5.2	2.8	2.5
4.2	2.5	1.8	4.7	2.2	1.6	5.2	3.0	2.2
4.3	2.0	1.4	4.7	2.2	2.0	5.2	3.0	2.2
4.3	2.1	2.1	4.7	2.4	1.8	5.2	3.2	2.2
4.3	2.3	1.6	4.7	2.5	1.8	5.3	2.3	2.1
4.3	2.4	2.1	4.7	2.6	2.0	5.3	2.7	2.0
4.3	2.5	2.0	4.7	2.6	2.2	5.3	2.9	2.0
4.3	2.8	1.7	4.8	2.1	1.9	5.3	3.0	2.2
4.3	2.8	1.7	4.8	2.4	2.0	5.4	2.6	2.1
4.4	2.2	1.7	4.8	2.5	1.9	5.5	2.9	2.3
4.5	2.2	1.5	4.8	2.5	2.0	5.6	2.9	2.2
4.5	2.2	1.7	4.8	2.6	2.1	5.8	2.7	1.9
4.5	2.2	2.2	4.8	2.6	2.0			



第25図 炭化米計測部位

第2節 ^{14}C 年代測定結果

第7号方形竪穴状遺構(SKI07)覆土内出土の炭化材を試料として、 ^{14}C 年代測定を試みた結果、以下のような報告があった。

学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書

1987年2月16日

秋田県埋蔵文化財センター 殿

1986年9月11日受領致しました試料についての ^{14}C 年代測定の結果を下記の通り御報告致します。なお年代値の算出には ^{14}C の半減期としてLibbyの半減期5570年を使用しています。また付記した誤差は β 線計数値の標準偏差 σ にもとずいて算出した年数で、標準偏差(one sigma)に相当する年代です。試料の β 線計数率と自然計数率の差が 2σ 以下のときは、 3σ に相当する年代を下限とする年代値(B.P.)のみを表示してあります。また試料の、 β 線計数値と現在の標準炭素についての計数率との差が 2σ 以下のときには、Modernと表示し、 $\delta^{14}\text{C}\%$ を付記してあります。

記

Code No.	試料	B.P.年代(1950年よりの年数)
Gak-13111.	Charred wood from Komorizawa.	990 \pm 100
	TKD SI 11.	A.D. 960

第6章 まとめ

方形竪穴状遺構について

中世城館跡とされる遺跡（以下で遺跡として述べる場合については『館』もしくは『館』跡とする）からは方形の区画をもつ竪穴が多く検出される。本報告書で「方形竪穴状遺構」として記述した遺構もそうした例であるが、その呼び名については竪穴住居跡として扱っているもの^(註1)、竪穴遺構、方形遺構、方形竪穴遺構、建物遺構としているものなど、その用途同様、様々に使われている。こうした遺構の用途・機能を考える時には2つのstageがあるように思われる。1つは『館』跡上に多く検出されるということにかかわり、もう1つは遺構の認定手続きにかかわっている。

第1のstageでは『館』の性格づけが、この遺構の機能を大きく左右している。鹿角地方の『館』を例にとれば、その行政的な側面が強調される場合と、軍事的な側面が強調される場合とがある。この2つの見方をもし二者択一的にとるのであれば、それはきわめて限られた時代の『館』の性格を論ずる場合には意味が認められるとしても、おそらくは平安時代の後、数百年間連続と続く遺跡としての『館』の全体像の把握には充分であるとは言いがたい。鹿角が中世騒乱の舞台として史書に登場するのは、大きく建武年間、康正年間、永祿年間、天正年間と300年間に4回ある。これらの争乱期には、花輪盆地の要所要所に突き出した形の火山灰台地は、わずかな労力を駆使しただけで、史書に『楯』として記されるような格好の軍事(防御)的な施設と成り得たに違いなく、現在残る空堀や郭面はそのことを十分に示している。しかし、この争乱は室町時代の後期から桃山時代までの間にはその激しさを増してはいるものの、それ以前の南北朝から室町時代の前半までは1世紀に1度の割りである。鹿角の国人たちが拠った『館』が次第に軍事(防御)的な機能まで帯びることを余儀なくさせられたとしても、それは遺跡としての『館』跡の末期的な状況下に起こったことである。数多い争乱によって代表されるかのような中世であっても、その背後には組織的集団としての鹿角国人層の生活が考えられなければならない。こうした組織的な集団を維持する機能、即ち行政的な機能を備えた集落であることが『館』跡の本来的な姿である。もしそうした機能まで失われたとすれば、それは即ち廢館につながったことだろう。したがって、現在空堀、急崖によって囲まれ、堅固な要塞に似た景観を呈する『館』跡もその郭面にある方形竪穴状遺構、掘立柱建物跡などについては、かなりの長期にわたる生活の痕跡を残しているものが含まれている筈であり、軍事(防御)的な中世城館としての性格に

とられることなく、古代以後から続く集落推移の側面から把握する方がより適当である。

次に第2のstageについて述べる。『館』跡郭面からみつかる方形竪穴状遺構については、住居であるか否かといった点に問題が集約されるように思われる。同種の遺構の名称は竪穴住居跡としている場合をのぞいては、家畜小屋、穀物倉庫などより広い概念に適用できる用語として用いられている。方形竪穴状遺構にこうした用途・機能が与えられる遺跡では、別に住居施設として掘立柱建物跡が考えられている。方形竪穴状遺構と掘立柱建物跡の用途・機能の別が郭面上の立地の違いとして、それぞれの遺構にあらわれているとみる見解である。しかし、現在までの段階ではそれぞれの遺構の対応関係、同時存在の検証などが困難な状況にあるように思われる。立地条件の相異を即用途・機能の別に還元することは、ある1時期を限った上では遺跡の有効な解釈になるとしても、古代の後中世という長い時間の枠を被せたなかでは危険ともいえるのではないか。さらにこうした住居以外の用途・機能が考えられる場合には、方形竪穴状遺構内に炉や竈のないことが理由の一つに数え上げられる。しかし、竪穴住居跡という名称自体が、住居の可能性を第一義的においている、というような緩やかさをもっており、いわば「一定規模の上屋構造が想定可能な竪穴遺構」の記号である。炉や竈に示される厨房設備の有無は、やはり直接に『住居』を規定するものではないといえる。以上のことから考えると現在、青森、岩手、秋田3県にまたがって検出される方形竪穴状遺構については、その立地や形態が様式的に包括可能であっても、用途・機能を類推するのに積極的な根拠を欠くと言わざるをえない。まだ現在の段階では、奈良・平安時代とは異なる構造の竪穴住居という概念を含ませておく方が、この後の展開がより円滑に進められると思われる。

熊館第Ⅰ郭上面の遺構からみた変遷について

方形竪穴状遺構は第4章で述べたように、大きく2つに分類できる。仮にA類を張り出し部をもつSKI03、SKI07、SKI08、SKI10とし、B類を張り出し部をもたないSKI01、SKI02、SKI05とすると、郭上面の使用期間の画期はつぎのように措くことができる。

1／(自然地形上の)B類方形竪穴状遺構の構築→2／自然地形の削平→3／A類方形竪穴状遺構の構築→4／郭面削り出し

これはおもにつぎのことを前提としている。

A・B類の方形竪穴状遺構が時間的な形式差を持つこと。これには共伴した遺物が2つとも非常に少なく、遺物の型式の差で遺構の形式をくくることができないのが弱い点である。しかし、A類B類とも、分類の基準となった張り出し部の有無のほかに各類のなかで共通する特徴

があり、遺構形式として設定するには十分である。そしてこの形式に現れる特徴は中世以前の奈良、平安時代竪穴住居跡の特徴と比較して、A・B類間に時間的な断絶があるか、もしくは全く異なる系統下の遺構であることを思わせる。またSKI08とSKI01でみたような重複関係があり、これが一つの鍵になると考えられる。

各面期を検討すると、まず1のB類方形竪穴状遺構が構築された時期には、構築面下に黄褐色の鳥越火山灰層の上位層がのこっている時期で、調査区は現在よりもその上面が広がったと推定される。既に郭を作るような施設はあった可能性もあるが、地山流失部分として記述をおこなったものが遺構である場合には、それが関係したとも推定される。次の2では、B類方形竪穴状遺構を削り、調査区部分を平坦にする作業が行なわれている。城館としての萌芽がこの時期にあらわれたと考えることもできる。これは次の3と平行することも考えられる。次の3には、張り出し部をもつA類方形竪穴状遺構が平坦面に構築される。2と3の間にはさらに郭上面を平坦にするような作業が行なわれたことも考えられる。4は現在の郭面が形成された時期である。と同時に郭南側の段築部で検出された空堀、土塁が構築されている。さらにこの後、柱穴群のうちいくつかのものが掘られている。

出土遺物からみた高瀬館の年代

今回の高瀬館跡熊館第I郭（以下熊館第I郭）の調査区は、3館からなる高瀬館跡全体から見ればそのごく一部分であり、面積的にも830㎡と小範囲である。しかしこの調査区が設けられた部分はその外観からしても、熊館第I郭が東にのびた郭上面の先端部という、中世高瀬館の堡塞的側面を強く印象づける部分である。調査の結果、郭上面からは方形竪穴状遺構11基、土坑16基など多くの遺構を検出し、また郭南側の段築部分は地山を削り出して造られた土塁と、空堀、溝が埋まっていることが確認された。郭上面の遺構群にはそのそれぞれの項で述べたように、相互に重複関係にある例が含まれている。また現在残る郭面自体も、第4章冒頭にのべたように土塁、空堀に示す堡塞的性格を備えた時期には、郭上面の一部の遺構を切って築かれている。したがって現在の郭の形で残されるまでには、いくつかに分けることのできる郭面の使用時期を想定することができる。館跡としての最終期は、鹿角地方の中世城館が長牛、花輪、毛馬内の3館を遺してすべて破却されたと伝えられる天正19(1591)年、および慶長11(1601)年を下ることはなく、16世紀末には高瀬館全体の景観もほぼ現在と同じであったことが推測されるが、中世城館としての時期がどれほどの存続期間をもってあったのか、今回の出土遺物の示すところによってみてみたい。

出土した遺物は前々章で記述されているように極めて少ない。このうち年代の決定にかかわ

る遺物としては、土坑内出土の13枚の銅銭、N9グリッド出土の青磁碗がある。ほかに形式的特徴を年代的に追跡できるかと思えるものにSK01土坑内出土の刀柄金具があるが、ここでは前2者の示す年代についてみる。

銅銭はすべて銭銘が明らかで、鏹銭、無銘銭の類はない。出土した13枚の中には初鑄年代の古い順に唐代の開元通宝から南宋末の景定元宝まであり、もっとも多いのは11世紀代の北宋銭である。鹿角市内の中世城館の発掘調査で出土した銅銭全体では、江戸時代の寛永通宝を除けば明代の永楽通宝まで出土している(第3表)。これらは日本に中国からの銅銭が輸入されはじめた平安時代末期から鎌倉、室町時代を通じての流通通貨であり、おおむね対宋貿易によってもたらされた宋銭が中心である。今回の調査で出土した銭種を鹿角地方の他の館跡出土のものと比較してみると、明代の洪武通宝、永楽通宝のない点が注意される。

第3表 鹿角市内館跡出土銅銭数

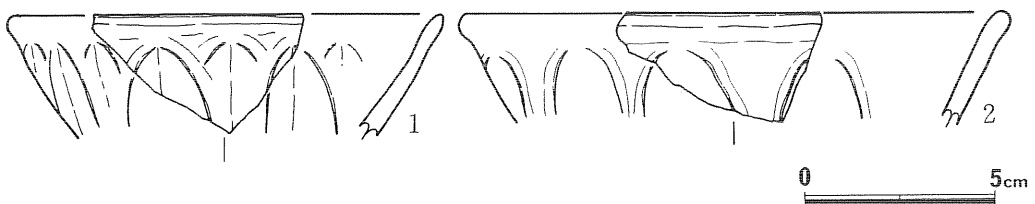
	小枝指七館	新斗米館	乳牛館 妻ノ神Ⅲ	花輪平館	湯瀬館	高瀬館・熊館	計
開元通宝(621)					2	2	4
至道元宝(995)						1	1
咸平元宝(998)			1				1
景德元宝(1004)		1	1			1	3
祥符元宝(1008)	1						1
天聖元宝(1023)				2			2
皇宋通宝(1037)	2	1	3			2	8
嘉祐元宝(1056)			1				1
嘉祐通宝(1056)	1						1
治平元宝(1064)			4				4
熙寧元宝(1068)	3			2		1	6
元豊通宝(1078)			1			1	2
元祐通宝(1086)					1	1	2
紹聖元宝(1094)			1				1
元符通宝(1098)						1	1
聖宋元宝(1101)	1		2	1			4
大観通宝(1107)			1	1			2
宣和通宝(1119)						1	1
淳熙元宝(1174)					1		1
大宋元宝(1225)						1	1
紹定通宝(1228)		1					1
景定元宝(1260)						1	1
洪武通宝(1368)	1	3	2	4			10
永楽通宝(1408)			1		2		3

高瀬館出土の青磁碗は、蓮弁文をもつ口縁～体部資料である。蓮弁文そのものは13世紀から16世紀にわたって、雷文などとも併用されて青磁の表面の文様として多用される。鹿角市内の遺跡では鹿角市新斗米館跡から、雷文帯をもった青磁碗の口縁部資料とともに縦位の刻線のあ(註6)る蓮弁文碗体部破片が出土している。また湯瀬館遺跡からも蓮弁文碗が破片で出土している。秋田県内の他地域では秋田市の後城遺跡B地区およびC地区で比較的まとまった資料の出土が(註7)報告され、山本郡峰浜村の中田面遺跡、雄勝郡雄勝町鶴沼城遺跡などでも出土例がある。県内(註8)出土の蓮弁文碗にも全国的な例と同様、大きく分けて幅広の蓮弁文を施すものと、縦位の密な刻線による極端に形式化された幅の狭い蓮弁文を施すものと(註9)の2つが認められ、さらに前者に含まれるものとして鑄の明瞭なものと鑄のない弧線を向かい合わせただけのものを指摘することができる。中田面遺跡出土の青磁碗〔第26図(1)〕は推定口径11.5cmの口縁部資料である。体部での器厚は4～5mm、釉層は内外面とも0.5mmほどである。胎土は白色で釉はやや明るい緑

色に発色している。口唇部の下から鑄のはっきりとした蓮弁文が片切彫によって表され、蓮の花弁はその重なりが表現されている。中田面遺跡からはこの蓮弁文碗とともに内面に2条の篋描き沈線の区画をつくり、区画内に飛雲文を配した青磁碗^(註10)(太宰府分類I-4a)や、内面底部に片切彫りの花卉文を施した資料なども出土している。鶴沼城遺跡出土の青磁碗〔第26図(2)〕は推定口径14.5cmの口縁部資料で、口唇部が厚くなるが、体部での器厚は4mmほどある。胎土は灰色で、やや暗い緑色に発色した釉が内外面とも0.7mm程度にかけられている。口唇の前面に突き出した部位の直下から描かれる蓮弁文は、無鑄の幅広のもので篋描きによる。中田面遺跡と同じ類のものは後城遺跡C地区出土のC-12~19として図示された資料があり、鶴沼城遺跡の資料には同じC地区C-20とされた資料が類似する。また形式化された蓮弁文を施す例としては、後城遺跡B地区B-8, 9, 13~15, 24、C地区C-22~24が相当する。

今回の調査で得られたものを中田面、鶴沼城両遺跡の資料と比較してみると、釉調は明るく粉青色を呈し、蓮弁の各単位の鑄は中田面の資料ほど鋭くはないが、それと認められる程の高さをもっている。3つの資料とも底部を欠いた口縁~体部の破片であるため、見込み部分や高台部分の特徴を見ることができないが、高瀬館跡の碗はおそらく太宰府分類でいうところのⅢ-2類に、また中田面遺跡のものはI-5b類にそれぞれ比定できるであろう。鶴沼城遺跡の資料は太宰府分類のI-5類に相当するかと思えるが、口唇部の前面に突き出した特徴は青森県^(註11)の尻八館跡出土の碗に類似するように思われる。

14世紀~16世紀の青磁碗の編年を試みた上田氏の分類^(註12)によれば、高瀬館跡の碗のように鑄の緩い細長い蓮弁文をもつものはA-I類とされ、13世紀末~14世紀初頭には主体的になるといわれる。また中田面、鶴沼城遺跡のような幅広の片切彫の蓮弁文をもつ例はB-I類、鶴沼城遺跡の例が尻八館のものと同じく分類されるとすればB-II-a類に、また後城遺跡B地区出土例はB-IV類に含まれるであろう。上田氏の編年に従えば、熊館第I郭出土の蓮弁文碗は13世紀末から14世紀の初頭におかれ、14~15世紀の鶴沼城遺跡例や、15世紀後半以降におかれる後城遺跡B地区例よりも古い。したがって、鎌倉~室町時代~安土桃山時代を通じての県内の出土例の中でも初期の段階にあり、その時期として鎌倉時代の後期が考えられる。碗とともに得られた銅銭が北宋銭を中心とした南宋代末期のものまでであり、明銭を含まない事実と引き合わせても符合するのではないかとと思われる。



第26図 中田面遺跡(1)、鶴沼城遺跡(2)出土蓮弁文碗

結 び

『鹿角の館(3)』では、高瀬館を構成する前館、熊館、浦館のうち、前館には牛頭天王社、高瀬明神社、薬師神社があるのに対し、浦館側にはそれが見られないことから前館よりも浦館ほうが古い可能性のあることが、そして、浦館についてはその景観が古代チャシ的なものをのこしているのではないかと指摘されている。小森沢という高瀬館を大きく2つにわけ谷の北に、浦館と同じく熊館も立地しており、そうした点からすれば、前館と熊館・浦館の間には時間的な違いのあることも十分考えられる。今回調査した部分での出土遺物から考えると中世城館としての時期のなかではかなり古い時期にあたり、また第5章第2節の¹⁴C年代測定結果も、あるいは郭上面の方形竪穴状遺構を、高瀬館が中世城館となる以前のチャシ的保塞、集落保塞^(註13)式館の構築物として位置づけることを支持する証左と思われる。

- 註1 小玉 準「乳牛平遺跡」『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅷ』
秋田県教育委員会 1984(昭和59)年
畠山憲司「谷地中『館』遺跡発掘調査報告書」
比内町教育委員会 1978(昭和53)年
船木義勝、小田島幸二「妻の神Ⅱ遺跡」『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅸ』
秋田県教育委員会 1984(昭和59)年
- 註2 小玉 準「乳牛平遺跡」『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅷ』
秋田県教育委員会 1984(昭和59)年
秋元信夫・藤井安正「高市向館跡発掘調査報告書」
鹿角市教育委員会 1982(昭和57)年
秋元信夫・菊池明「新斗米館跡第Ⅱ次発掘調査報告書」
鹿角市教育委員会 1981(昭和56)年
工藤清泰「浪岡城跡Ⅳ－昭和55年度浪岡城跡発掘調査報告書－」
浪岡町教育委員会 1981(昭和56)年
- 註3 瀬川司男「岩手県大瀬川館」『北奥古代文化第9号』
北奥古代文化研究会 1977(昭和52)年
- 註4 桜田 隆「妻の神Ⅲ遺跡」『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅸ』
秋田県教育委員会 1984(昭和59)年
- 註5 石川長喜・毘野靖「柳田館遺跡」『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅳ』
秋田県教育委員会 1980(昭和55)年
- 註6 桜田 隆「湯瀬館遺跡」『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅰ』
岩手県教育委員会 1981(昭和56)年
- 註7 小松正夫・石郷岡誠一・日野久他「後城遺跡発掘調査報告書」
秋田地所(有)、秋田市教育委員会 1979(昭和54)年

第6章 まとめ

- 註8 永瀬福男・熊谷太郎「中田面遺跡、重兵衛台Ⅰ遺跡、重兵衛台Ⅱ遺跡、
根洗場遺跡発掘調査報告書」
秋田県教育委員会 1980（昭和55）年
- 註9 大野憲司「鶴沼城遺跡発掘調査報告書」
秋田県教育委員会 1980（昭和55）年
- 註10 横田賢次郎・森田勉「太宰府出土の輸入陶磁器について」『研究論集4』
九州歴史資料館 1978（昭和53）年
- 註11 岩本義雄「尻八館出土の遺物について」『日本城郭大系2』
新人物往来社 1980（昭和55）年
- 註12 上田秀夫「14～15世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究No.2』
貿易陶磁研究会 1982（昭和57）年
- 註13 江上波夫・桜井清彦他「館跡 東北地方における集落址の研究」
東京大学出版会 1958（昭和33）年



図版1 高瀬館跡周辺航空写真(点線が郭面)



高瀬館（熊館部分）遠景



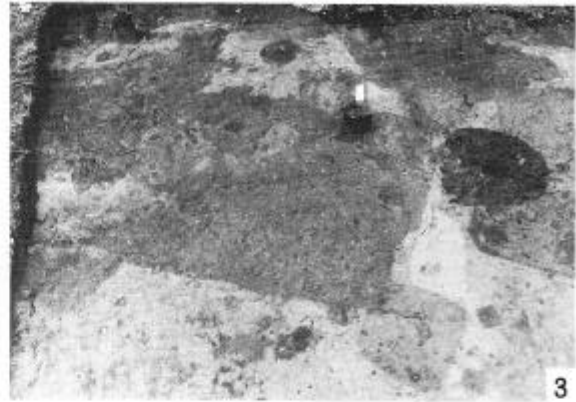
図版2 調査区（熊館第I郭）全景



調査区（熊館第Ⅰ郭上面東端）現況



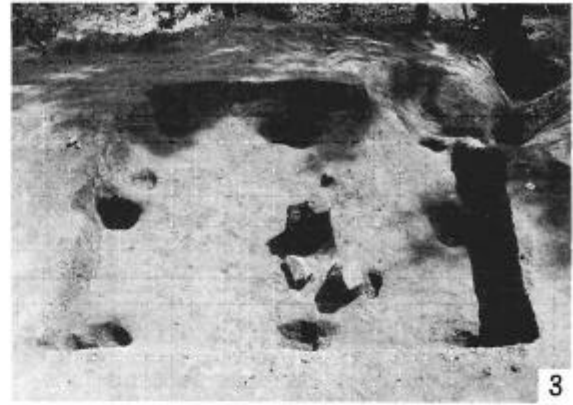
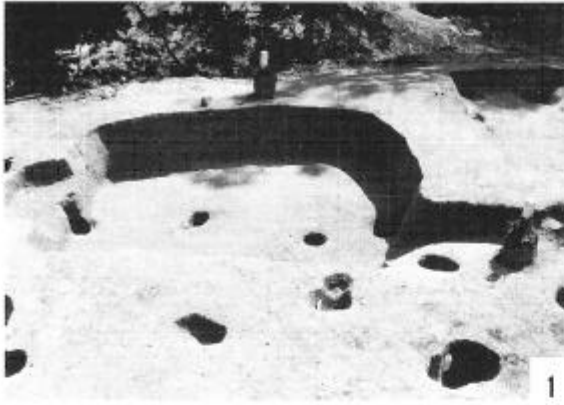
図版 3 南無段菜部調査区調査後状況



- 1 郭上面調査区南縁遺構確認状態
- 2 第1号方形竪穴状遺構 (SKI01)、
第8号方形竪穴状遺構 (SKI08) 確認状態
- 3 第2号方形竪穴状遺構 (SKI02) 確認状態
- 4 第1号方形竪穴状遺構 (SKI01)、
第2号方形竪穴状遺構 (SKI02) 完掘状態
- 5 第3号方形竪穴状遺構 (SKI03) 確認状態
- 6 第3号方形竪穴状遺構 (SKI03) 東-西断面



図版4



1 第3号方形竖穴状遺構 (SKI03)
完掘状態【北>南】

2 第3号方形竖穴状遺構 (SKI03)
完掘状態【東>西】

3 第4号方形竖穴状遺構 (SKI04) 完掘状態

4 第8号方形竖穴状遺構 (SKI08) 完掘状態

5 郭上面調査区北縁遺構確認状態

6 第7号方形竖穴状遺構 (SKI07) 確認状態

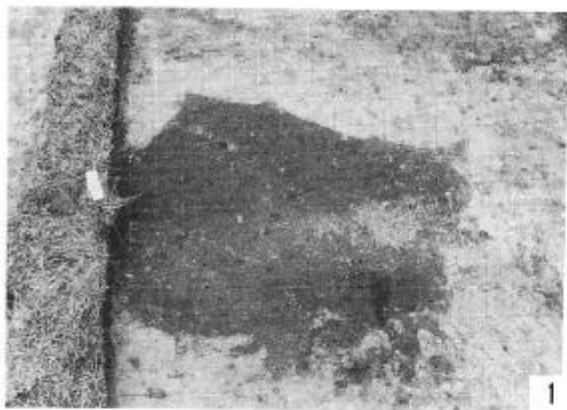


図版 5



- 1 第7号方形竖穴状遺構 (SK107)
完掘状態【西>東】
- 2 第2号土坑 (SK02)、
第7号方形竖穴状遺構 (SK107)
完掘状態【東>西】
- 3 第9号方形竖穴状遺構 (SK109) 確認状態
- 4 第9号方形竖穴状遺構 (SK109) 東-西断面
- 5 第9号方形竖穴状遺構 (SK109)
完掘状態【西>東】
- 6 第9号方形竖穴状遺構 (SK109)
完掘状態【北>南】

図版 6



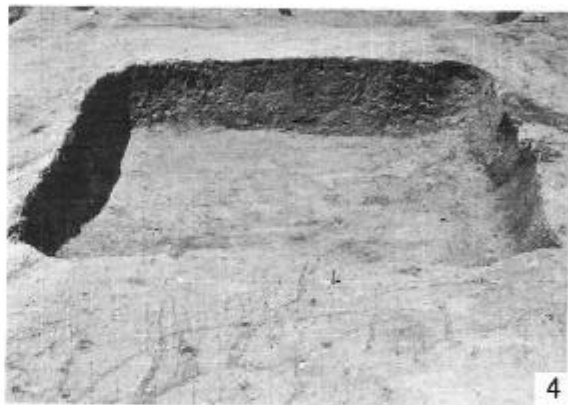
1



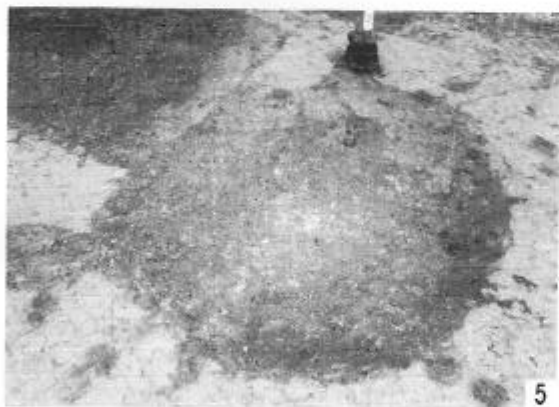
3



2



4



5

1 第1号土坑 (SK01) 確認状態

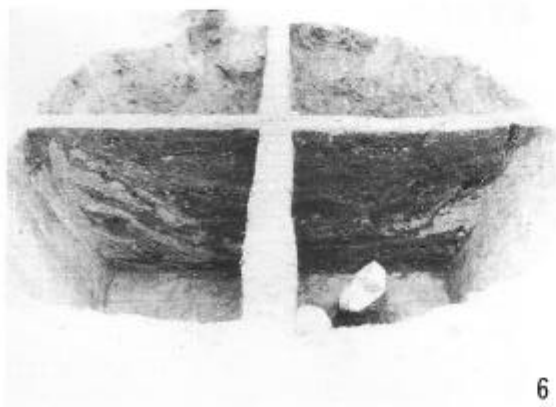
2 第1号土坑 (SK01) 南—北断面

3 第1号土坑 (SK01) 刀子出土状態

4 第1号土坑 (SK01) 完掘状態

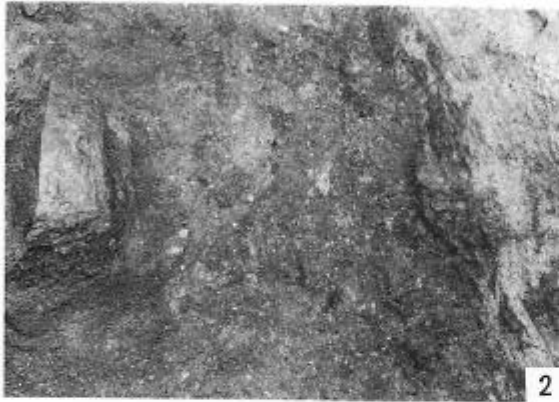
5 第2号土坑 (SK02) 確認状態

6 第2号土坑 (SK02) 東—西断面



6

図版 7



1 第2号土坑 (SK02) 南西側からの断面

2 第2号土坑 (SK02) 銅銭出土状態

3 第2号土坑 (SK02) 完掘状態

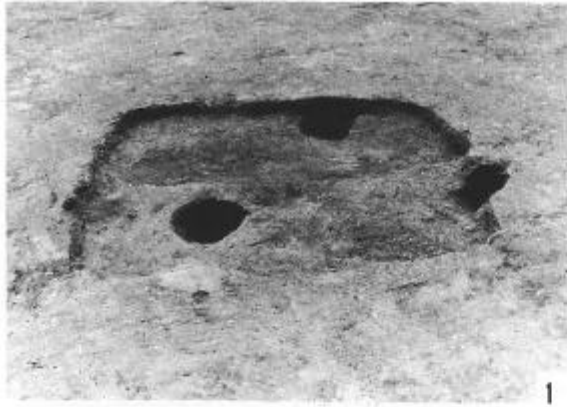
4 第3号土坑 (SK03) 確認状態

5 第3号土坑 (SK03) 東-西断面

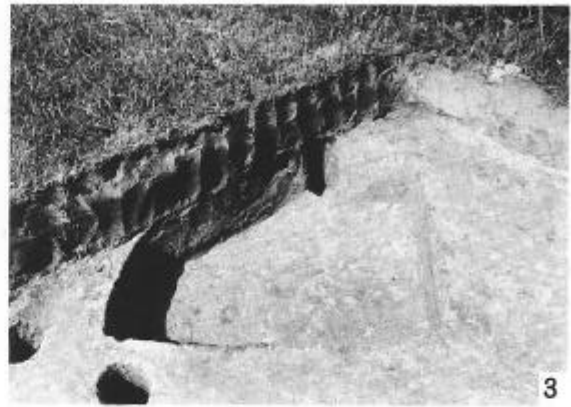
6 第3号土坑 (SK03) 完掘状態



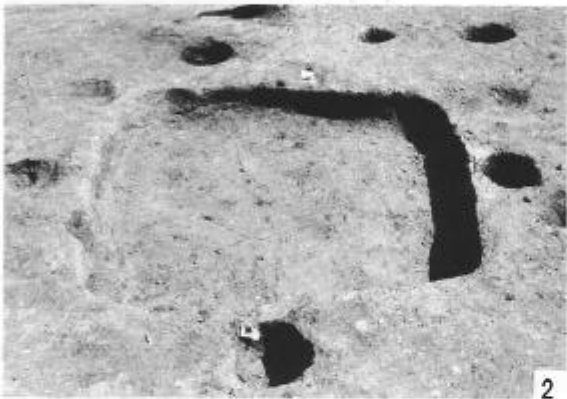
図版 8



1



3



2



4



5

1 第4号土坑(SK04) 完掘状態

2 第5号土坑(SK05) 完掘状態

3 第7号土坑(SK07) 完掘状態

4 第9号土坑(SK09) 完掘状態

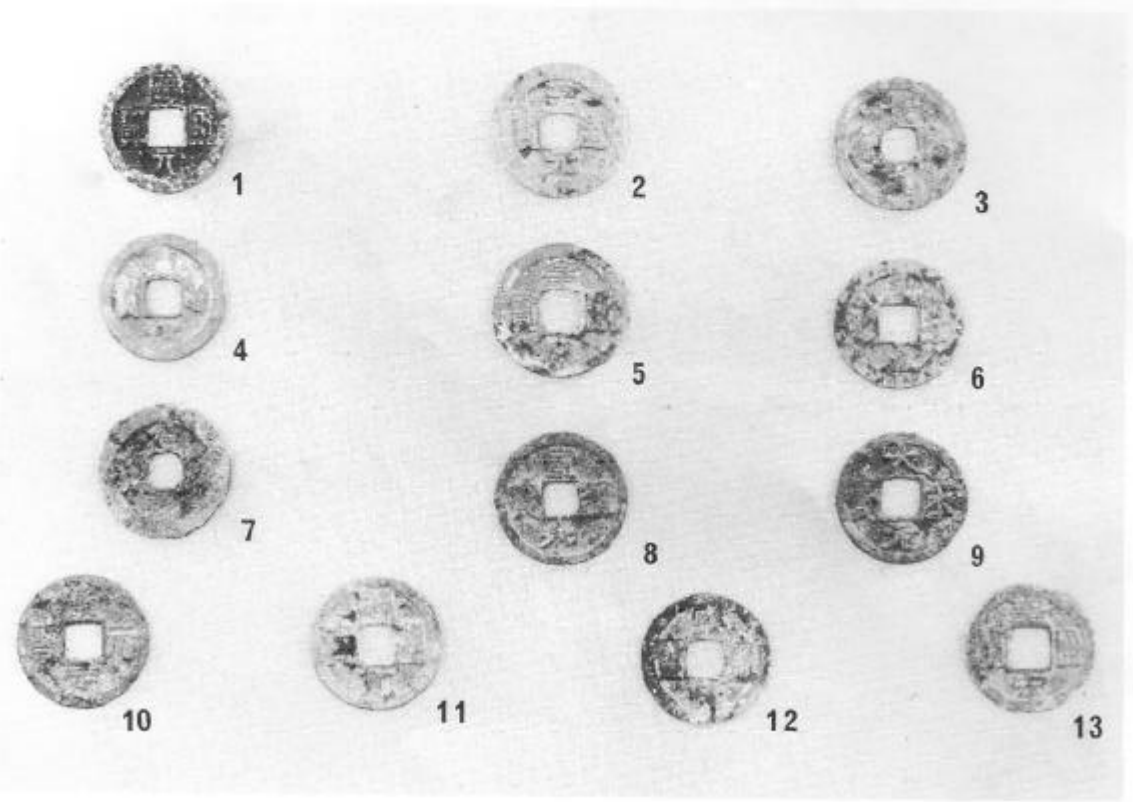
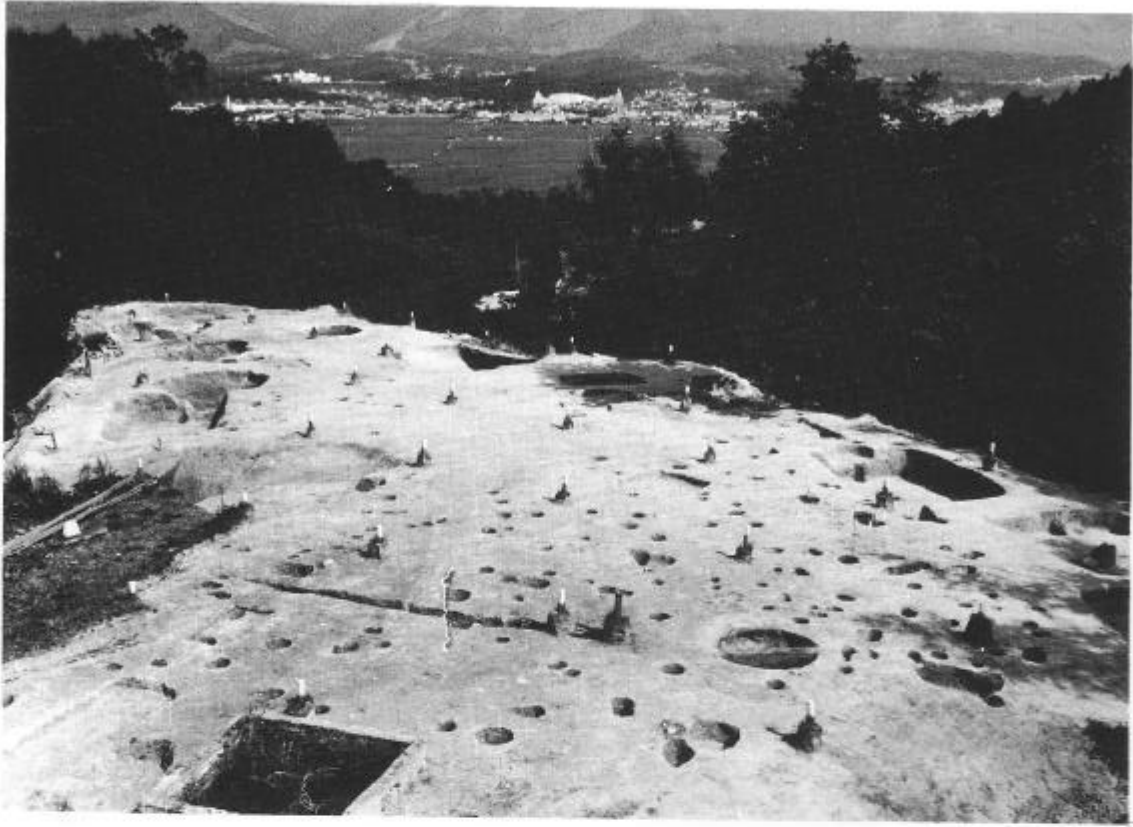
5 第1号溝跡(SD01)

6 第10号方形竪穴状遺構(SKI10)と地山流失部分

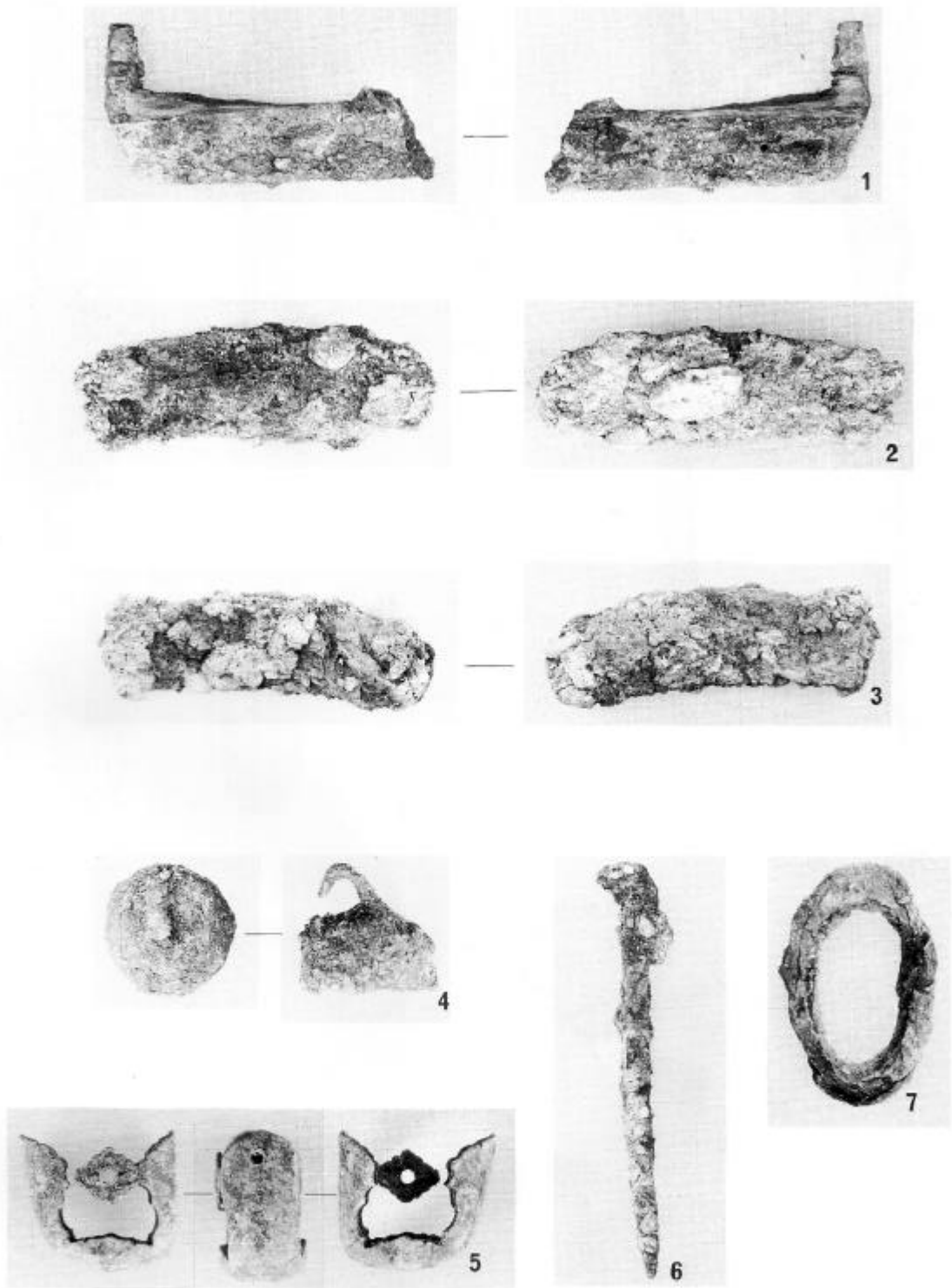


6

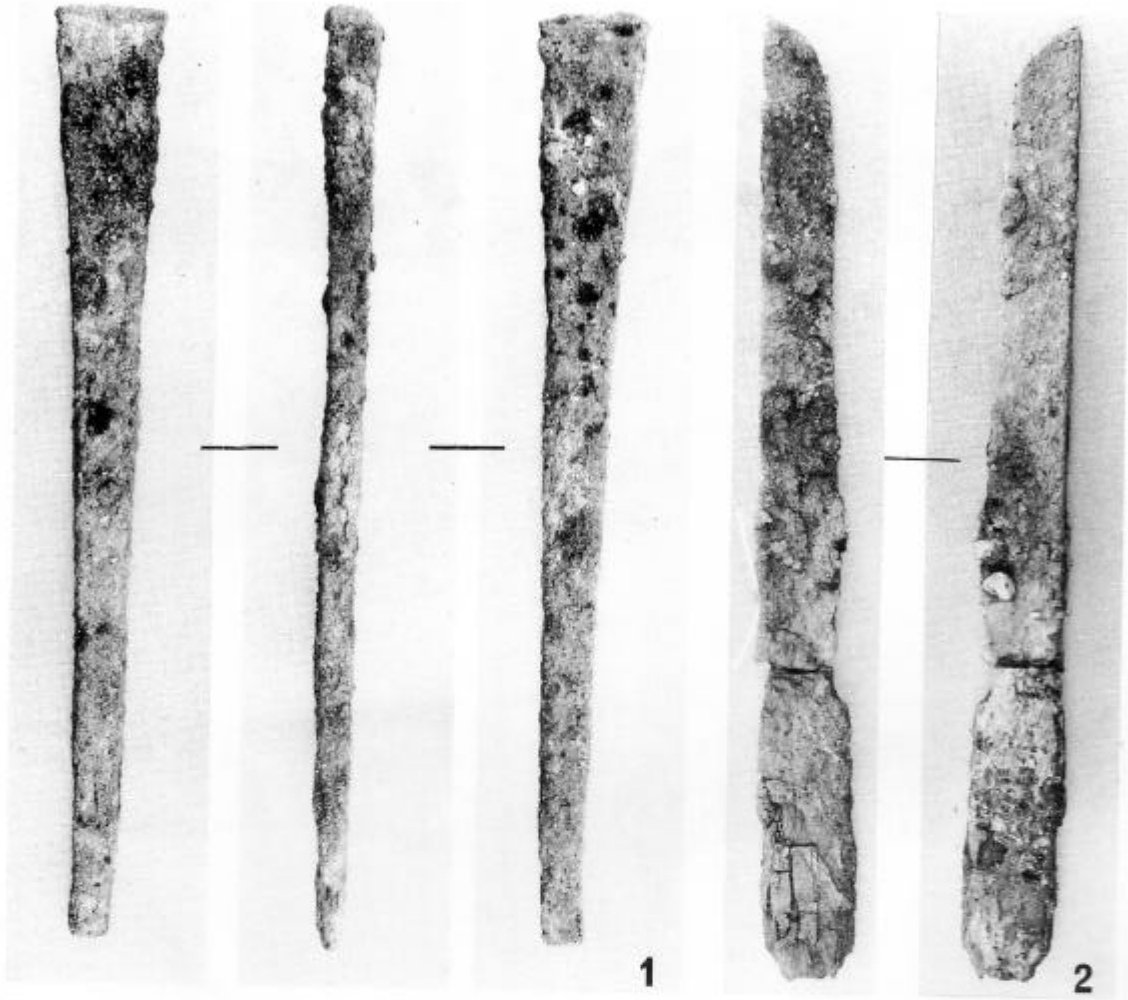
図版9



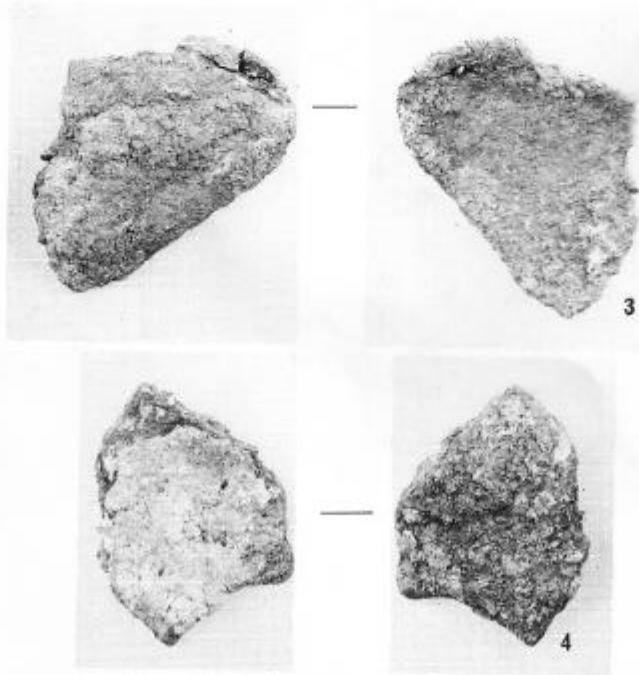
図版10 各遺構内出土銅銭



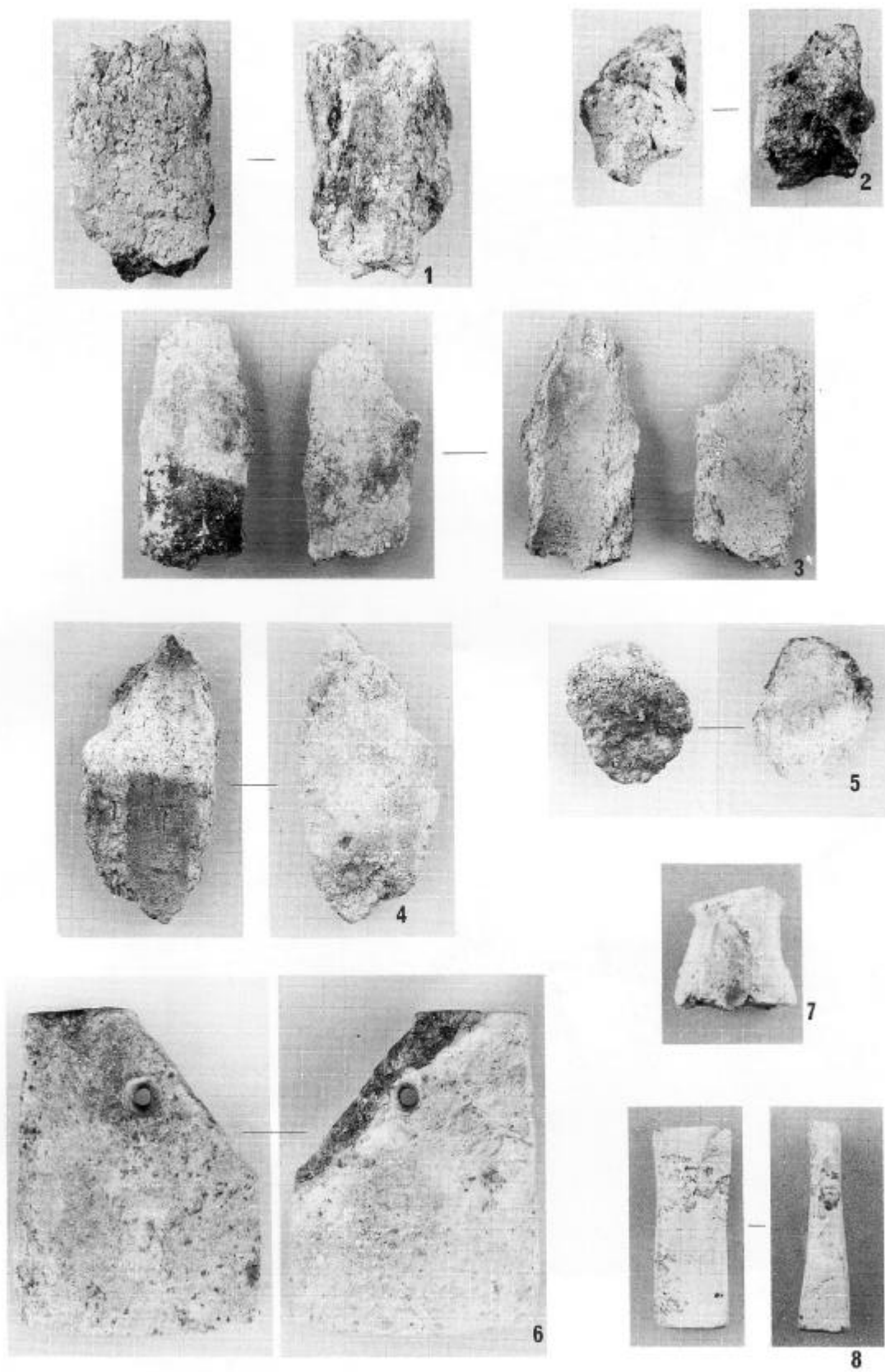
図版11 各遺構内出土遺物(1) 1,2:SK02/3 :SK04/4,5,6:SK01/7 :SK03



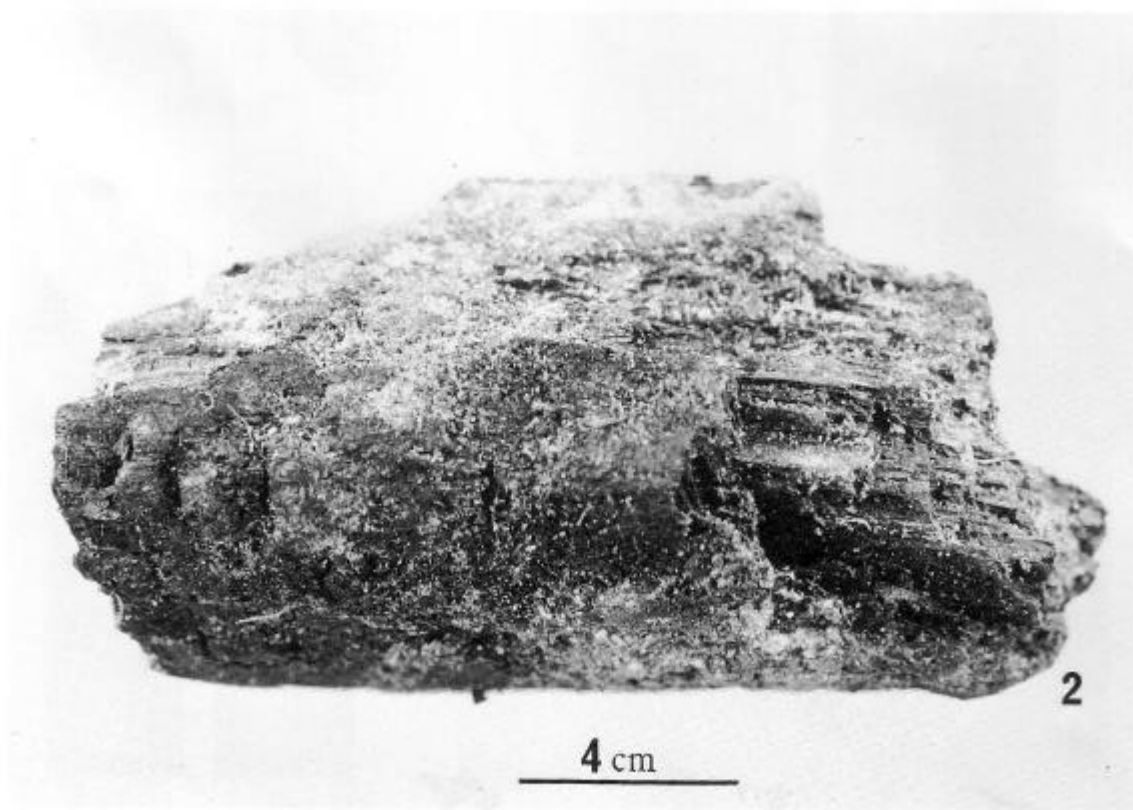
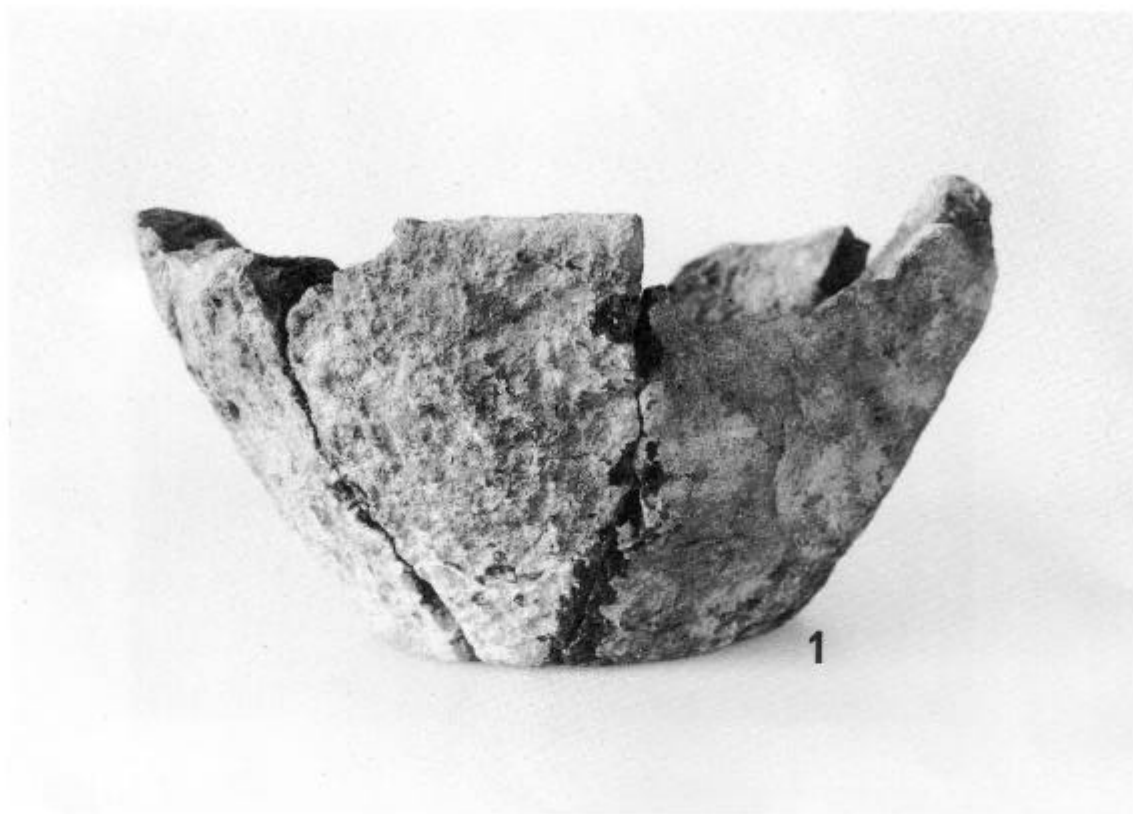
図版13 (上)



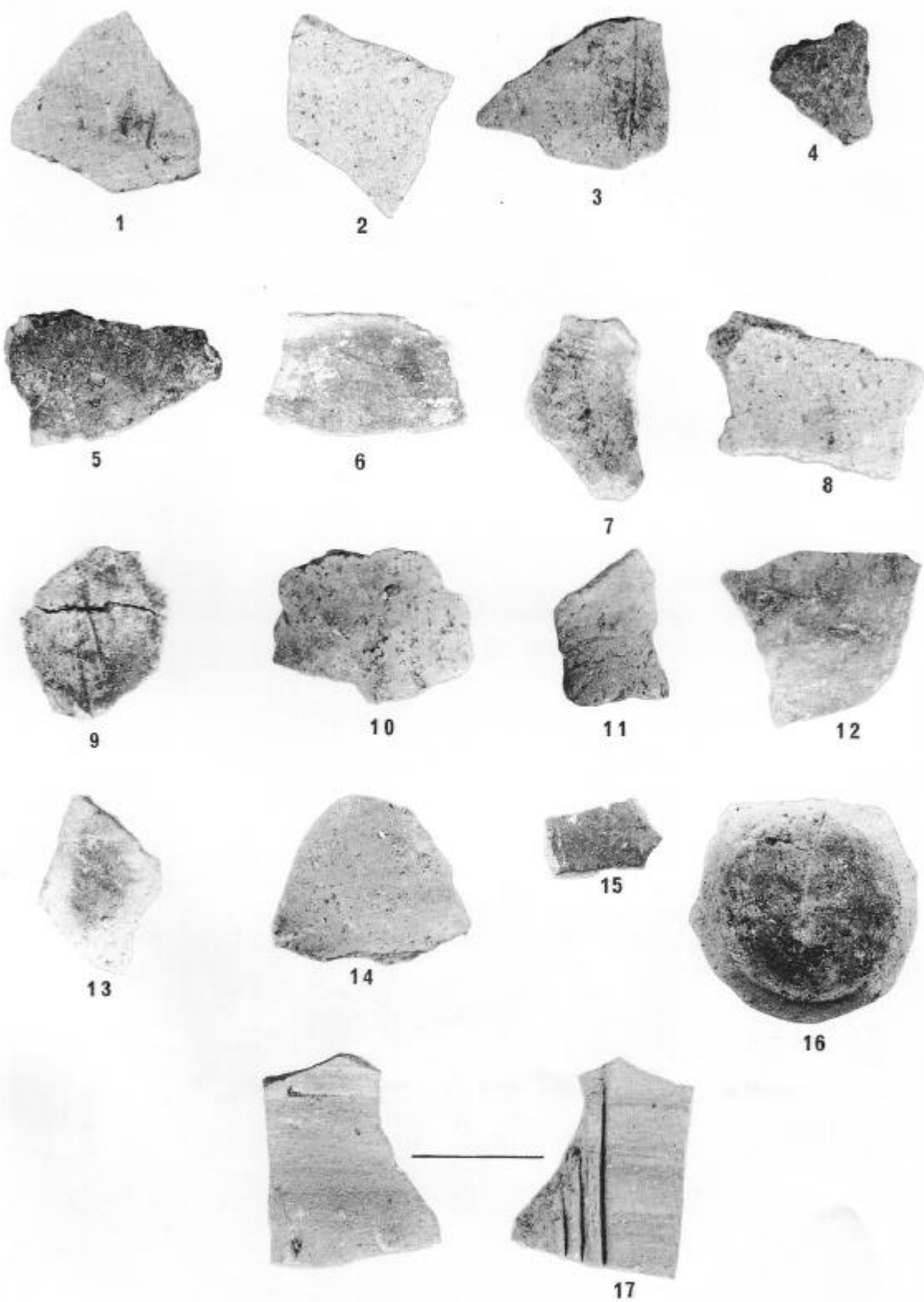
図版12 (下) 各遺構内出土遺物(2) 1:SK02/2:SK01/3,4SKI02



图版13 各遺構内出土遺物(3)
 1,2,3 : SK01/4 : SK02/5,7 : SK09/6 : SK07/8 : SK03



図版14 各遺構内出土遺物(4)1, 2, SKI07



図版15 各遺構内出土遺物(5)その他

1:SK01/2,3,4,5:SK02/6,7,8,9,10,11,12,13,14,15/SK09/16:SK10/17:遺構外



作業風景



調査参加者

図版16